

「Miss Fujishiro has disappeared.」(藤代さん居なくなっただです)
賢の返事に長老は暫し、考え込んだ。そして言った。

「The space of this area overlaps with the other power spot areas. Especially the linkage between here and Boynton Canyon is very strong. She maybe there.」(この領域の空間は他のパワースポット領域と重畳しています。特にこことポイントン・キャニョンのつながりが非常に強いです。彼女はそこに居るかもしれません。)

長老の言葉で、全員直ぐにポイントン・キャニョンに移動することにした。長老はそのパワースポットにはセドナで一番強力な渦があると言った。リチャードは頭を抱えるようにしている。長老に促されてリチャードは車を出した。一旦179号線に戻って、北上し、89A号線を経てセドナを通り過ぎ、ドライ・クリーク・ロードという名前の道を北に向かった。途中からボイトン・パス・ロードという狭い道を走り、Boynton Canyon parking lot という立て札のある駐車場に車を停めた。リチャードがトレイルは最低でも3時間は掛かると言った。既に2時を廻っている。しかし、誰も時間のことは気にしていなかった。みんな辺りをきょろきょろと見回しながら亜希子を探したが、駐車場には亜希子の姿は無かった。一行は長老の後に附いてトレイルを進んで行った。梓と愛子は不安を隠せないようだった。賢は長老を信頼していた。信頼するしかなかった。長老は先頭に立って歩いた。トレイルの入り口付近にあるカチナ・ウーマン(カチナの女性)というスーッと伸びたような赤い岩が見える。賢は意識をその岩に向けて、観察する次元を変えてみた。その周辺に渦が見える。遠方の岩が直ぐ目の前に感じられる。しかし、そこにも亜希子の存在は感じられなかった。一行は長老の後に附いてトレイルを進んだ。今までのトレイルと違って、歩きやすい、森のように木の茂る道を歩いた。賢の意識が次第に拡大しはっきりしてきた。木々の周りにレッドロックや谷が見える。しかし、そのほかの5人にはそれは見えていないようだった。賢は更に意識を拡大していった。トレイルの先に大きなレッドロックが見えた。どうやらそこがこのトレイルのゴールのようだった。しかしその先にも道は続いていて、キャニオンに繋がって

いることが分かった。賢は意識の拡大と同時に自分の体が軽くなるのを感じた。どんどん軽くなってゆく。賢は自分の前を歩いている様に声を掛けた。

「梓、僕は空を飛んで亜希子を探すから、皆にそのままゴールまで進むように伝えてくれ」

「リーダー、そんなことできるのですか？ さっきみたいにですか？」
梓がそう言うか言わないうちに賢は意識を空に向け、鳥が飛び立つようにゆっくりと上昇し始めた。梓が大声で長老に呼び掛けた。

「Elder, Mr.Uchimi is flying in the sky to the canyon. 」(長老、内観さんがキャニオンに向かって空を飛んでいます)

梓の大きな声に3人が同時に振り向いた。長老が空を見上げた。賢が両手を広げて林の上を飛んでゆく姿が見えた。そして直ぐに木々の葉で見えなくなった。リチャードは両手のひらを額に当てて、頭を下げた。愛子は只、呆然として賢の見えなくなった木々の葉の間を見つめている。長老が言った。

「He revived and showed radical himself now. He will find Miss Fujishiro soon.」(かれは蘇って、本来の自分自身を顕しました。かれは直ぐに藤代さんを見つけるでしょう)

それからのトレイルは3人にとって辛くなるほど長いものだった。特に梓と愛子は不安のどん底に沈んで、黙々と歩き続けた。リチャードは何か考え事をしているのか、時々立ち止まって頭を左右に振っては、再び歩き始めた。長老はただ黙々と先頭を歩いた。1時間以上歩いて、漸く林から出て展望が開け、大きなレッドロックが姿を現した。そこがトレイルの最終到達地点だと長老が言った。しかし、そこには賢の姿も、亜希子の姿も無かった。愛子の不安は我慢の限界に達していた。

「田辺さん、どうしよう。これからどうなるの？」

時計は3時半を回っている。田辺は焼け付くような日差しを初めて意識した。長老の言葉に従って、トレイルの先を溪谷に向かってもう少し歩いてみることにした。4人が言葉なく歩いてゆくと、あたりの景色が次第に岩っぽくなってきた。そのとき梓が叫んだ。

「リーダーー！ 亜希子さーん！」

右手の大きな岩陰から、賢と亜希子が姿を現した。二人は手を振っている。愛子が飛び跳ねて叫んだ。

「賢パパー、賢パパー！ 亜希子さーん！」

岩でごつごつした道を、賢は亜希子の手を引いてよろけながらやって来た。

「良かった。あのレッドロックの向こうに亜希子が居たよ。みんな、心配掛けたな。I found Miss Fujishiro behind that red rock. I'm sorry we've worried you.」

賢は日本語と英語で皆に詫びた。亜希子が下を向いて言った。

「本当に、何度もご心配をおかけして、申し訳ありませんでした。わたくしは、皆さんがいてくださらなかったらどうなっていたかわかりません。本当にありがとうございました」

賢が亜希子の言葉を英語に訳して長老とリチャードに伝えた。二人は微笑みながら、亜希子の帰還を祝福した。賢が亜希子に言った。

「亜希子、君は祐子のところに行きたいと云う意識が働いているから、こういうエネルギーの強い場所では、存在位置が不安定になるんだと思うよ。難しいかもしれないけど、ここにいる間は祐子のことは念頭から外していたほうが良いと思うよ。特にここでは意識を不安定にさせることは危険だからな」

「はい、あなた、分かりました。皆さんに、本当に申し訳なく思っています」

亜希子は瞑目し、賢に向けて自分の意識を集中させた。賢の言うとおりに不安定な感覚が薄れてきた。その姿を見ていて、リチャードは再び不安に陥ったようだった。しかし、亜希子の瞑目について賢が英語で説明したので、リチャードも漸く安心したようだった。賢が3人の女性達に向かって言った。

「セドナで一番エネルギーの強いといわれる場所に居るんだから、全員瞑想をしてみよう。近くに寄って、隣通し手をつないで、いいね。」

3人の女性は不安だったが、賢の言葉に従うつもりになった。賢は長老

とリチャードに了解を求めてから、近くの平坦な岩に移動してその上に登り、一人一人腕を取って引き上げてから、全員に座るように指示した。女性達が座ると、輪になって隣同士で手をつなぐように言った。それから4人で瞑想を行った。長老は微笑みながら4人を見つめている。リチャードは再び不安にさいなまれた。15分ほどすると、4人が同時に岩の上から50センチほど浮き上がった。

リチャードは腰を抜かしたようになった。それから5分ほどすると、4人の姿が半透明になり、霞んできた。リチャードが長老に言った。

「What's the matter, sir?」（どうしたのでしょうか、ご長老?）

「Do not worry. They are moving to the real plane now. It's important process for them and necessary process for us too.」（心配しなくていい。かれらは今実次元に移行しつつあるんだ。彼らには重要な課程で、我々にとっても必要な過程なんだ）

「Why do we need their meditation here, sir?」（どうして、彼らのここでの瞑想が、我々に必要なんでしょうか、ご長老?）

「Because, it's the reason why they would have come here.」（なぜなら、それが彼らがここにおいでになった理由だからだ）

リチャードは長老の言った言葉の意味を考えたが、理解できなかった。しかし、それ以上質問しなかった。更に15分ほどすると、4人の姿が次第にはっきりして来て、空中に浮いた姿がはっきり見て取れるようになった。それから10分ほど掛けて、4人はゆっくりレッドロックの上に降りた。賢が静かに目を開けた。まだ3人の女性は瞑目している。賢が話し掛けた。

「さあ、静かに目を開けて、そう、お互いがそこに居ることを確認するんだ。いいね・・・・・・それじゃ、この岩から降りるよ」

賢が先に岩から下りて、一人一人、手を取って降りるのを助けた。愛子が言った。

「賢パパ、すごかったわ！今いるこの世界は、何なのかしら？」

「愛子、あれが実際の世界だ。僕も、こうしてはっきり見たのは初めてだ。想像以上に素晴らしい、言葉では言い尽くせない世界だったな」

亜希子が言った。

「あなた、わたくしも、初めて実世界を拝見させていただきました。この世界は、あの世界の一部を写し取った世界のように思えます」

梓が言った。

「わたくしが今見たものは、真実なのでしょうか？でも、ここの世界より、もっと真実っぽいから、真実なのでしょうね。自分があんなふうに物を見たり、感じたりできる世界があるのなら、そちらに移りたいような衝動を覚えます。やはり、あれが真実の世界なのですね」

賢が言った。

「自分があの世界を見て、経験して初めて、人間というものがどれほどすごい能力を持った存在として生かされているか分かるね。我々は同時に無限の種類現象を体験できるような構造になっているんだね」

愛子が言った。

「賢パパ、わたし、まるで種の中を見てきた1輪のコスモスになったような気持ちがする。自分の意思でどんな花にもなれるし、どんな色の花を咲かすこともできるようで、不思議なんだけど、やっぱり、自分はピンク色のコスモスなんだと思って、花を咲かすのを楽しみにしているコスモス、そんな気がする」

「うん、うまい表現だね。君達は自分がどのくらいの時間、あの世界に居たと感じた？」

「はい、わたくしは一月くらいに感じました」

亜希子が言うと、梓も

「わたくしは、もっと長く感じました。そう3ヶ月くらいかな」

「賢パパ、わたしなんか、ずーっと居たような気がする。うーん、何年も、何年も、だけど時間があつたのかしら」

「そう、愛子の言うように、この世界のような全員に概念として固定された時間は感じないんだ。だから、自分の意識でどの様にでもなるはずだ。梓、どうだ、この世界の認識が変わったか？」

「はいリーダー、まだ実感が湧いてきませんが、今日の体験で、少なくとも自分の今までの常識を一旦全て捨てて物を見る必要があることに

気付きました。これから、会社に戻った後、どうやって生きてゆけばいいのか、ちょっと自信を無くしています。リーダー、指導していただけますか？」

「勿論だ。これは君達ばかりじゃない。僕自身だって、自分の考えていた実次元に対する考え方を修正しなくてはならない。自分の能力がこれほど大きいとは恐れ入った。ねえみんな、そう思うだろう？」

3人の女性達は同時に頷いた。時間は4時半を廻っていた。黙って4人の会話を聞いていた長老が、リチャードの方を見て頷き、それから賢に振り返り言った。

「The sun set here is spectacular. We shall continue the trail to the limb of canyon first, then go back to Red Rock Crossing to see the sunset.」（このサンセットは見応えがあります。わたし達は最初にキャニョンの縁まで行って、それからレッド・ロック・クロッシングに戻って、サンセットを見ましょう）

「The vista of Cathedral Rock from Red Rock Crossing is very beautiful at sunset time. It shines gold color.」（レッド・ロック・クロッシングからみるキャセドラル・ロックはサンセットの時、とても美しいんですよ。金色に輝くんです）

リチャードの話に、女性達はその景色を是非見てみたいと思った。賢が長老と話し込んでいたときに梓と愛子が眺めていた景色だ。ふたりはあの赤色の岩が金色に輝くところを想像しただけで胸が高鳴ってきた。亜希子も漸くうなだれていた顔を上げた。顔に輝きが戻ってきた。一行はトレイルを続けた。そこからは岩の多い道だった。キャニョンの縁に到達すると、5分ほど休憩をしてからそのまま駐車場まで戻った。時計はもう7時20分を回っている。陽は次第に傾いてきていた。長老が8時半頃に日の入りになると言っている。一行はそそくさと車に乗りこんだ。レッド・ロック・クロッシングでは既に多くの観光客が日の入りを待っていた。オーク・クリーク越しに望む、キャセドラル・ロックの姿は得も言われない美しさを一行に示してくれた。陽は沈み掛かっている、次第にレッド・ロックがオレンジ色に変わってきた。岩はやがて輝くような

黄金色に変化した。アメリカ人、カナダ人、ドイツ人に混じって日本人の観光客も、てんでに歓声を上げている。賢たち一行も身動きせずに見とれていた。賢がふと横を見ると、日本人の観光客が一团になってレッド・ロックを眺めている。左右の手の指を絡めて瞑想している4人の30歳前後の女性達と、50歳代の男性達3名が賢たちの方に注意を向けていたが、そのうち、2人の男性と一人の女性が歩いて近づいて来た。

「日本の方でしょう。どちらから来たのですか？」

最も年長と思われる、半分白髪 of 男性が尋ねた。賢が応えた。

「こんにちは。僕達は東京のものです。スコッツデールに僕の両親が住んでいるものですから」

「それは、どこですか？」

「フェニックス・カウンティにある住宅地域です。」

「そうですか。我々は2日前にツアーで来ました。セドナがパワースポットとして有名ですから。4箇所のヴォルテクスを廻っています。このパワーは凄いそうですね」

「はい、そう聞いています」

男性は左右の手の親指をクロスして反対側の人差し指にそれぞれ接触させながら言った。

「わたくし達は、気のパワーをアップさせようと思ひましてね。ここにある4つのヴォルテクスに立って、こうやってメビウスの環を作って、気流を高めているんです。あなた方は何か目的があつてセドナに来られたのですか？」

「はい、ホピの人たちの生き方を学ぶために来ました」

「このパワースポットでは何か影響を受けましたか？」

「はい、体が浮いたり、消えたり、遠くのものが見えたりしました」

賢は実次元を観たことは口にしなかつた。女性達が目を丸くした。

「えーっ？本当ですか!？」

もう一人の男性が疑心ありげに聞いた。確かに、賢の言葉は、少なからずそこに居た日本人には奇異に聞こえたようだった。最年長の男性が言

った。

「ここレッド・ロック・クロッシングも、かなり、パワーを感じるでしょう。もしできるのであれば、少し、空中浮揚したときの状態を再現してもらえませんか？」

明らかに挑戦的な言葉だった。しかし、賢もこの空間を上空から観てみたくなった。

「分かりました。少しやってみます」

賢は3人の女性の方に向けて頷いて見せた。梓は微笑んだ。亜希子と愛子は頷いた。リチャードと長老の姿は無かった。賢は静かに両手を広げ、空に上昇するように意識を集中した。賢の体が宙に浮いた。空から見る夕暮れのセドナは見事だった。賢は更に高く上昇した。それを観ていた日本人の一行が大きな声を上げた。

「オーッ、凄い！」

「すごいわー！」

驚いて声の出ない人達もいた。その日本人の声に振り向いたアメリカ人の一行が大騒ぎを始めた。ドイツ人も驚嘆の声を上げた。賢は15メートルほど上空に上がると、そのままキャセドラル・ロックの方向に飛んでいった。大声を上げた者達も、ただじっと賢の動きを追った。賢はキャセドラル・ロックの上まで来ると、岩の上空を2周ほど廻ってからゆっくりと一番大きな岩の上に降り立った。愛子が言った。

「賢パパ、大丈夫かしら？小さくてよく見えないけど」

梓が意識を賢に向けた。賢の姿が眼前に映し出された。梓にしか見えないビジョンだ。

「岩の上は思ったほど広くないけど、大丈夫みたい。心配する必要はなさそうよ」

梓が愛子に向かって言った。亜希子が言った。

「わたくしが、彼に話しかけてみますわ」

亜希子は瞑想をし、賢に話し掛けた。

「あなた、大丈夫ですか？大丈夫なら、手を振ってください！」

賢が手を振った。双眼鏡で岩を見ていたドイツ人が言った。

「Oh, er schwenken seiner hand.」(彼が手を振っている)

「I cannot believe it.」(信じられない)

アメリカ人の女性が叫んだ。辺りは一気に騒がしくなった。

暫くして賢が戻って来た。もう陽も落ちかけてあたりは薄暗くなりはじめた。しかし、戻って来た賢の周りに大きな人垣が出来た。人々がいろいろ質問をしているようだ。賢はそれらの質問には答えずに、少し大きな声で話した。

「New era is coming soon. This is not a special thing in the next era. You can do it like me. You can fly in the sky. You can see the remote things. You can distinguish the sound far away.」(直ぐに新しい時代が来ます。次の時代ではこれは特別なことではありません。あなた方はわたくしのようになります。あなた方は空を飛べます。あなた方は遠くの物を見ることができます。あなた方は遠方の音を聞き分けられます。) 誰かが拍手をした。拍手は広がり、大きな渦のような音の波を作り出した。

賢は後を追ってくる人たちを避けながら、3人を促して急いで車に戻った。リチャードと長老は車に居た。3人が乗るとリチャードは直ぐに車を走らせた。後を追ってきた人たちは、賢たちが去ってしまうと、仕方なく自分たちの車に戻って行った。リチャードは途中で長老の家に寄り、長老を降ろすとそのままセドナのホテルに向かった。

チェックインが済むと、4人は直ぐにホテルのレストランで食事を摂り、二人ずつに分かれて部屋に入った。10時半を回っていた。部屋は思いのほか広かった。シャワーを浴びると愛子は賢に自分のバレエを見て欲しいと言い出した。どうしてもエアポート・メサで感じた、体の浮くような回転をもう一度味わいたいと言った。賢は「時間が遅いから10分程度ならいいよ」と了解した。愛子が踊り出した。やがて回転する場面になった。愛子は回転を始めた。そして、回転部分が終わると直ぐにダンスを止めてしまった。

「賢パパお願い、もう一度だけ、回転だけでいいから躍らせて」

「どうした？うまく踊れないのか？」

「ううん、そうじゃないの。あと少しであの軽く、くるくる回るリズムが取れそうなの。賢パパ、わたしが回転するとき、意識で少し回転を加速させてくれないかな？」

愛子は再び、回転し始めた。賢は愛子の回転の周波数を頭にリズムとして作り、それを少し高めてみた。愛子の回転のスピードが上がった。もう少し高めてみた。また、少し速くなった。もうこれ以上速くすると危ないと思うほど速く回転してきたので、今度はその回転数を減らすように働きかけてみた。やはり、愛子は同調して、回転速度を下げた。10分が経過したので、賢は意識を切った。愛子はまだ回転していて、今度は、自分で回転速度を上げたり下げたり、それもかなりの速さで切り替えた。やがて、愛子は止まった。

「賢パパ、ありがとう。できたわ！わたし、自分で体を軽くして、回転できるようになったみたい。今度、先生に見せてみるわ」

翌朝、4人は日の出前に起きた。ホテルの部屋からレッドロックが見える。賢の心にアリゾナに来ているという実感が沸き上がってきた。愛子も窓からセドナの赤い岩々を眺めて、改めて昨日の感動を呼び戻してでもいるかのように佇んでいた。ホテルでコンチネンタル・ブレックファースト（簡易朝食）を摂り、チェックアウトしてリチャードを待った。この日はホピの村、シヨンゴ・ポヴィ村を訪ね、長老にホピの生活について聞き、そこでカチナダンスを見物することになっている。リチャードは8時過ぎにやって来た。近くのモーテルに宿泊したと言った。一行は一旦フラッグスタフに出ることにした。30分ほどで着いた。まるでヨーロッパのアルプスを思わせる丸太作りの家屋と針葉樹の目立つ町だ。フラッグスタフはただ通り過ぎるだけだった。879号線を北に向かい、一旦右折して10分ほど走ってから、今度は左折しリウブ道路に入り BIA 2 という狭い道路を1時間ほど走ると、Mesa（メサ）が見えた。そこからメサの台地を上り始めた。リチャードが「ここがホピ保護区の第3メサと呼ばれるところだ」と言った。長い上り坂を登り切ると平坦な土地に出た。リチャードは急に右側に分岐した狭いでこぼこ道に侵入し、少し走って車を停めた。

「We shall take a look at petroglyph of Hopi prophecy. This place is not open to the ordinary tourists. You are invited. Please get off the car to walk to there. However, please do not take pictures and write down anything. These actions are strictly prohibited.」(ホピの予言の岩絵を見ましょう。ここは普通の旅行者には公開されていません。あなた方は招かれています。車を降りてください。しかし、写真も書き写しも駄目です。そういう行為は厳しく禁止されています)

これまで出番が無かったストレスを回復させようともするかのよう
に、リチャードは胸を張って全員に言うと、先頭を切って歩き始めた。
歩きながらリチャードが「ここはオライビの村の近くだ」と言った。道
らしき道も無い、岩の間のごつごつした赤土の上を進んでゆくと、リ
チャードが突然大きな岩を指差した。

「This is the prophecy petroglyph.」(これが予言の岩絵です。)

丘の上に予言の岩絵はあった。東に向いて切り立った岩の上に描かれて
いた。何とも奇妙な絵がどこからか転がって来たような巨石の表面に描
き刻まれているのは、周囲の岩だらけの背景の中で、何となく浮き上
った感がある。一つの線から上昇して先で二つの道に別れ、その線の上
に円や幾何学図形、人の形をしたマークが描かれていた。「第4の世界」
に人間が出現してから滅亡するまでの歴史が予言されているのだとリ
チャードが言った。

「*****」(屋根の上に人が3人乗った電車が、テープのようなも
のを翻らせて坂道を下ってゆくような絵だ。そして、電車の過ぎ去った
跡に線路工夫のような人間が2人立って一人は万歳をし、一人は作業を
しているように見える。電車は坂を下り、今にも崖から落ちそうに描か
れている。崖の下には手に槍を持った人間がいる。崖の壁面には洞窟が
あって、その洞窟の上方に十字の印が刻まれている・・・賢はそんな印
象を持った。自分の脳裏を通り過ぎる稚拙な印象を客観視していた。賢
はその岩絵を脳裏に書き込んだ。梓も必死になってその絵のイメージを
記憶しようとしている。リチャードが長老から聞いた話として、それぞ
れの部分を指差しながら説明した。

「左側に人が一人、左手でこの絵全体を支えるように立っている。これが、ホピの人々が「マサウウ」と呼ぶ創造主だ。第2の世界が滅んだ後、マサウウは第3の世界が始まったとき、第1、第2の世界が犯してきた過ちを二度と犯すことのないように、人類に進むべき道を示した。その道を進むことで、人類は自分達の任務をきちんと遂行でき、その結果霊的な成長が達成される。マサウウの右側に描かれた丸印は平和のシンボルで、マサウウの指示に従えば平和が続くことを意味している。しかし、人類は3度（みたび）過ちを繰り返すことになる。マサウウが左手で示している道は人類の進むべき道だが、その道が上方に伸びてその先が二つに分かれ、上の道と下の道に分離する。このように2つに分離することが人類の課題だが、それは人類の持つ自我に起因している。マサウウは下の道を示したのだ。その道は神を敬い、正しい儀式を行ってゆく道だ。そうすることで人類は大自然の恩恵を受けて生きることができることになっていた。ところが人類は自分達の自我に基づいて、自分達の勝手に作った上の道を歩むことになる。下の道には二つの円が描かれている。（賢が電車の車輪だと思ったものだ）これは世界に起こる2つの大事件を表している。人類の勝手な行為によって世界に歪が生じ、それが二つの大きな出来事となることを示している。マサウウは人類にこれらの出来事を通じて気付きのチャンスを与えている。しかし、人類はそれに気付かず物質至上主義を突き進む。その先で、道はそのまま進む道と、真下に降りる道に分かれる。そこが現在の位置で、人類は真下に向かう人々と、そのまま突き進む人々に分かれる。真下に向かうのは気付いた人々、そのまま突き進むのは気付かない人々だ。創造主は誤った道を進むものに罰を与えるようなことはしない。ただ、気付きの機会を与えるだけだ。下の道にある3つ目の丸が4度目の大きな出来事を示している。上の道を突き進んだ人々はその大きな気付きを与えられ、更そのまま突き進むと、厳しい道が続き、途中で先の無い地点に至る。そこから先は無いのだ。気付いて行いを改めた人たちは若年から高齢に至るまで幸福な人生を生き、永遠に続く道を行くことになる。第3の世界の気付きとして与えられた2つの出来事は、第1次世界大戦と第2次世界

大戦であり、3番目の出来事は第3次世界大戦の勃発を予言しているのだ。上の道を行くものも、下の道を行くものも「浄化のプロセス」を経ることになる。しかし、上の道の先には未来は無く、下の道には永遠の平和が約束されていて、それはホビに集う人々によって達成されてゆくのだ」

ここまで話すと、リチャードは胸を張って深呼吸をした。賢と3人の女性達は感謝の意味を込めて拍手をした。リチャードは自分の説明に対する賞賛と受け取ったようだった。賢はこの予言の解釈が3次元的な解釈になっていることを感じたが、言葉は挟まなかった。誤った道を生きている人達に自省の念を起こさせるためにはその解釈で、十分だと思った。しかし、ほとんどの人は形を示さなければ理解できないことも確かだった。賢は、マサウウの示したと謂われる内容を、一つ上の次元の視点から解釈し直してみようと思った。まず、どうして正しい道を生きている人たちの道に気付きのための丸印が描かれているかだ。それは正しい道を生きているということが、精神的、如いては意識的に生きているということを意味し、その場合にはマサウウの丸に気付くということで、物質的に生きている上の道を行くものは、気付かずに通り過ぎるということの意味していると思った。途中で、物質偏重に生きてきたものたちが、精神的に生きる道に進むものとそうでないものに分かれるが、依然として物質偏重に生きるものにはもう、安楽な道は無く、険しい道しか与えられない。精神的に生きるものにとっては、何の苦痛も感じないが、物質偏重の者達には厳しい出来事が起きる。つまり、意識を目覚めさせたものには、浄化のプロセスは衝撃としては感じられないということを表していると思った。道の上に載せたように描かれている丸印がそれを意味しているように思えた。「意識的に生きるべきだ」ということを示唆していると思った。そう解釈することで、マサウウの予言は、賢がスワミから伝えられた示唆に合致すると思った。賢はもう一度岩絵を見つめ、頭の中で模写してから、リチャードに礼を言った。女性達も礼を言うと、リチャードは全員を誘導して車に戻った。そこから第3メサの端にあるオライビの村に向かった。道はそれほど整備されていない。やがて、ア

ドベと呼ばれるレンガで造られた平坦な屋根の建物が立ち並ぶ地域に着いた。それは現代的な雰囲気を感じさせない場所だった。あちこちに車が置いてあり、唯一それが現代の村であることを物語っているのだが、それでもずっと昔に遡ったような奇妙な印象を4人に与えた。リチャードは1軒の家の前に車を止めると、皆に車の中に居るように言ってから、一人で車を降り、その家に入って行った。暫くすると、リチャードは昨日の長老を連れて現れた。リチャードが「ここが長老の住まいだ」と言った。昨日の家はインディアン・ジュエリーなどを販売する店舗だと言った。長老が車に近づいて来て4人に挨拶をした。賢たちも昨日の礼を言い、車から降りて長老と握手を交わした。しかし、長老は家の中に入るように言い出さない。少しすると、家の中から長老の妻が現れた。長老は一步身を引いて妻の為に道を空けた。妻は4人に近づくと、言った。「Good morning everyone. How are you?」(おはようございます。ご機嫌いかが?)

「Good morning ma'am. We are fine, thank you.」(おはようございます、奥様。皆元気です。ありがとうございます)
賢が代表して挨拶すると、妻は続けて言った。

「Welcome to our house. Please come in. Did you take breakfast?」
(ようこそわたくしどもの家においでくださいました。どうぞお入りください。朝食は食べましたか?)

どうやら、この家では妻が主のようだと賢は思った。家の中は昨日の家と異なり、右の壁の手前に囲炉裏があり、壁には煤が着いていて、生活の臭いを感じられる。部屋には木で出来た長椅子2脚とテーブル以外には特に目立った家具は無く、きれいに片付いていた。そこは居間の様で、突き当たりの壁には扉があり、その向こうに部屋があることが想像される。左側の壁には奥に通じる扉の無い出口がある。妻の案内で全員、木の長椅子に腰掛けた。妻が左奥の出口から出てゆくと、長老が言った。

「How are you today? You would be tired of tight movement yesterday, wouldn't you.」(今日は如何ですか? 昨日のきつい移動でさぞお疲れのことでしょう)

妻のきちっとした対応に多少緊張気味だった4人は、長老のいたわりの言葉でほっとした。妻が茶を入れて持って来て、それをテーブルの上に置いた。

「Shall we talk over tea.」(お茶を飲みながら、話しましょう)
皆礼を言った。妻が言った。

「Did you have any impression when you came here?」(ここに来たとき、何か印象を持ちましたか?)

「Yes. I feel nature all around your pueblo including houses.」(はい、わたくしは、家々を含め、あなた方の村全体に自然を感じます)
賢が応えた。賢の言葉で初めて妻の顔に微笑が浮かんだ。

「You understand our life style. We have been keeping this simple life style for a long time. Do you like to look around in our house?」
(あなたは我々の生活スタイルを理解していますね。わたくし達は長い間、このシンプルな生活スタイルを維持してきました。あなた方はわたくし達の家の中をご覧になりたいですか?)

4人は喜んだ。妻は4人に茶を薦め、一呼吸置いてから4人を連れて家の中を案内した。本当に物が少ない。生活必需品は何処にあるのだろうかと首を捻るほどだった。妻が台所を案内してくれたとき、そこに貯蔵庫のような収納箱があるのに気付いた。妻はその収納箱に、必要最小限の食料を保管してあると言った。台所の粗末なシンクの上に作られた棚に食器類が並べてある。食器の数も少なかった。俗に言う白物家電の類は一切見当たらなかった。妻が言った。

「We only have a automobile as a modern product. Any other modern products are not necessary」(わたくし達は近代製品では自動車だけしか持っていません。他の近代製品は必要ありません。)

妻は続いて、ジュエリーを加工する部屋に4人を案内した。そこにある設備は、昔からあるものだった。全て手作りだと妻が説明した。一番後ろを附いて来た愛子がくさめをした。気温がかなり低い。妻が愛子に尋ねた。

「Do you feel chilly? Are you OK?」(寒いのか大丈夫?)

愛子が初めて英語で応えた。

「I'm fine, thank you」(わたくしはげんきです、ありがとう)

3人が笑った。しかし、妻は心配そうに愛子に近づき、棚の上に置いてあったショールを取ると、愛子の肩に掛けてくれた。愛子は

「Thank you very much sir.」(ありがとうございます、だんな様)

と言って頭を下げた。妻は愛子の背中を軽く叩いた。賢はそのとき初めて妻の顔をじっくり眺めた。まるで日本人の顔である。ホピやナバホの祖先がモンゴロイドだということは聞いたことがあったが、これほど、日本人にそっくりだという認識はなかった。子供の頃に遊んだインディアンの友達や、その母親からはそんな印象を受けた記憶が無い。意識はまだ子供で、日本人というものを知らなかった為だろうと賢は思った。愛子も暖かい麻子の手に触れられたような感覚を覚え、目頭が熱くなるのを感じた。家の中を一通り廻ると、妻は元の居間に戻って来た。長老とリチャードが長椅子に腰掛けて待っていた。賢たちが椅子に腰掛けると妻は茶が冷めたと言って、全員のカップをトレイに載せ、台所の方に姿を消した。長老が言った。

「Today, We could show you the Katina Dance. I informed all Hopi pueblo yesterday that the Prophesied people are visiting Oraibi now. They agreed to show you our Sacred Katina Dance today.」(今日、我々はあなた方にカチナ・ダンスをごらんに入れることができます。わたしは昨日、全てのホピの村々に、予言された人々が今オライビを訪問していると伝えました。彼らは今日あなた方に神聖なカチナ・ダンスをごらんに入れることに同意しました。)

妻がニコニコしながら、茶のコップを持って戻って来た。茶を配りながら言った。

「We realize you are our dear friends coming from outside our tribe.」

(わたくし達はあなた方のことをわたくし達の種族の外から来た大切な友達だと分かっています)

長老が言った。

「We are very happy to show you our spiritual activity. It is the

first time to show visitors the Katina Player Dance.」(我々はあなた方に我々の霊的な行為をお見せできて幸せです。訪問者に祈りのカチナ・ダンスをごらんいただくのは、初めてのことです。)

賢は彼らが自分達に部族の者にしか見せない霊的なカチナ・ダンスを見せようとしている事に、体全体に痺れが広がるような喜びを感じた。3人の女性も胸躍る思いを抱いた。リチャードが、来る途中に予言のペトログリフ(岩絵)を観て来たことを長老に話した。長老は頷きながら、話を始めた。長老の話は昨日の話より、一步踏み込んだ話だった。それはこの世界の終焉についての話だった。長老はこれまでホピの考えを4度国連に伝えたが、国連からは何の応答も無かったと言った。このまま突き進んだら、この世界が崩壊してしまうということと、人類は生き方を変えなくてはならないこと、そしてホピ自身のことを伝えたと言った。国連はそれを認識できたのかどうか疑問だと言った。ホピの働き掛けがないがしろにされるということは、この世界が終焉への軌道からそれることができないことを意味すると言った。その終焉の前段階でさまざま災害が散在し、終焉に近づけば近づくほど集中的に起きてくること。それは自然的なもの、人為的なもの—政治・経済・科学・人間が作ったもの、更には霊的なもの、あらゆる範疇で既成の価値観を崩壊に導くものだと言った。それらは環境への不適合というレベルの問題ではなく、この世界に存在することを否定されるような出来事になると言った。自然的なものは気候変動、酷暑化、寒冷化、洪水、火山噴火、地盤沈下、生物種の絶滅などが起きてくる。政治はその舵取りができなくなり、的確な指導のできる指導者が不在となる。自由主義経済は人間から離れ、実態の無い数字の上のシステムと化す。貧富の差は極端になり、それは全ての国の国内、国家間に及ぶ。そして、最も富める者が、最も貧しい者と化す。共産主義は腐敗と、その理念の転倒により、資本主義以上の格差社会を作り出す。そして、共産主義は最貧を生み出す仕組と化す。科学はマクロのもの、ミクロのもの限界を認識できずに、どんどん深みに嵌ってゆく。それは物質主義をベースに発展した結果であり、人類の見出したことは全て人類にのみ重点を置いたもので、宇宙のバランスを

崩す結果を将来する。宇宙はその均衡を保つために、人類の見出した科学を根底から否定する方向に動く。人類が地球を離れ宇宙空間に居を構えようとして出てゆくとき、その崩壊が加速され始める。現在の映像の科学は光の持つ特性に変化が生じたとき、全て無に帰す。音響システムは音の伝播、共振に別の要素が加わったとき、そのシステムが不適切なものになる。現在の科学の根底にある法則事態が変化する。この世界が終焉を迎えた後は、現在の科学は形を変えない限り存続できなくなる。それは原子力、電気、化石燃料等からエネルギーを得る科学の終焉を意味する。そして、全く異なったエネルギー源を元にした科学が新たに生じ、それは人間の意識にリンクする。更に、この物質的な世界だけでなく、今まで数え切れないほどの人たちが追求してきた精神世界もその意味を失う。既成の宗教はどの宗派も、教義に矛盾を生じ、もはやこの世界や宇宙、そして、人間の存在を説明できなくなる。生死の意味も説明できない。なぜ、異なる宗教間で生死観が異なるのかも説明できていない。そして現在も奇跡と呼ばれるさまざまな現象があるが、その現象の意味を理解しているものは居ない。いずれそれを説明できる者が現れる。現在の錬金術も、魔術も、気功、念道、共振現象、あらゆる精神と物質的現象を結び付けている手法も、他の手法のみならず、それ自体の説明すらできない。たとえば、気功では、気を集中し、そして、ヒーリングや作用を起こすことを行うが、気とは何かを説明できていない。そして、集中させてパワーを得ようとする気と矛盾する、気を集中せずに宇宙の周波数に同調させて、手かざしでヒーリングを行う霊気との相違を説明できない。それは、エネルギーとは何かを知らないからであり、同調しようとする宇宙の周波数とは何かを知らないからである。これらは新しい人々によって明らかにされ、現在のシステムの崩壊と共に、新たなシステムとして構築されてゆく。長老の話はそこで止まった。そして、賢に向かい、「この世界の構造を理解し、それを世界中に伝え、人々が次の世界に移るときに道案内をしてくれるのがあなたたちだ」と言った。賢はただ黙って聞いていた。長老の話肯定も否定もしなかった。梓は、驚きをもって長老の話聞いていた。しかし、何が疑問で、何が解明さ

れていないのか、はっきりした理解に到達できなかった。亜希子は、英語の意味が十分には理解できなかったが、現在のシステムが全て、限界に来ているということと話しているらしいということは分かった。そして、賢と自分達が期待されていることも理解した。愛子は話の内容はほとんど理解できなかったのですが、ただ、時々茶を飲んで、部屋の壁をじっと見つめたり、奥に通じる通路を眺めたりしていた。そして、なぜ長老の妻が奥に姿を消してから、戻って来ないのかと疑問に思っていた。長老の話が一区切りしたとき、奥の通路から妻が姿を現わした。赤黒い果物の実を盛った大きな陶器の皿を持って戻って来た。長老の話が終わるのを待っていたのではないかと愛子は思った。

「These are fruits we harvested on this mesa. Please take them with tea.」（これはこのメサで獲れた果物です。お茶と一緒に召し上がってください。）

5人は礼を述べて、赤い実の果物を一つずつ手に取った。それはよく熟れたネクタリンだった。どの実も赤黒く、そして少し柔らかかった。先ず、愛子がカリリと噛んで、思わず日本語で言った。

「美味しい。とっても甘いわ」

賢がそれを訳して言った。

「She said it's very tasty and sweet.」（彼女はとても美味しくて、甘いと言いました。）

その言葉と同時に、全員がネクタリンを齧った。賢は嘗て両親と一緒に生活していたとき、フェニックスのスーパーマーケットでバルク販売されていたネクタリンを買ってもらって、店から出ると直ぐに食べた時のことを思い出した。それはここのネクタリンと同じような色をしていたが、もっと酸っぱかったと記憶している。ネクタリンがこんなにも甘くなるものかと感心した。皆それぞれに、果物の甘さに喜びを覚えていた。妻が言った。

「Fruits are our main foods same as corns and beans. We seldom take meats.」（フルーツはとうもろこしや豆と同様に我々の主食です。肉類はほとんど食べません）

賢は、自然の中で生きるということが、実感として蘇ってきた。子供の頃、セドナでホピやナバホの友達と遊んだとき、彼らがお菓子をほとんど食べなかったことを思い出した。彼らは、時々果物を食べていた。しかし、それもほんの少しだけ口にする程度だった。どうしてお菓子を食べないのか聞いたとき、彼らが応えた言葉を思い出した。「食べたいと感じないから」と言ったのだ。賢は自分が、美味しそうなお菓子を食べたというより、母がおやつにと持たせてくれたお菓子をおやつの時間に食べていた。それは自分ではなくて、母の意志だった。インディアンの友達の行動を見て、「自分も、好きなときに、好きなように食べたい」と母に言ったことがある。母はただ笑っていた。亜希子が言った。

「This is the best fruit I have ever taken. Thank you very much, ma'am.」（これは今まで食べた中で最高の果物です。おくさま、ありがとうございます。）

亜希子はこれまで、世界中の美味しい果物を食べてきた。母がおやつや、食後に出してくれた。日本では手に入らないような南国の果物も随分食べた。それらは確かに味は良かった。しかし、体全体が喜ぶような感動は無かった。しかし、このネクタリンは、一口食べたときに体が喜んだのを感じた。それは体全体、そして意識も同調したような感動の経験だった。亜希子は真実を言った。妻も長老も、全員の喜んでい様子に満足しているようだった。もっと食べるように妻が促したが、皆、一つで十分に感じていた。一行は家を出て、オライビ村の中を見学して廻った。生活に必要なもの意外に余分なものが何も無かった。長老がここの集落は文明の利器から遠ざかった生活をしている人たち、最後まで予言を信じて生きている人たちが集まって生きている集落だと言った。そして、「ここを出て、新たに村を作った人たちがいる。それはこの第3メサの西の外れあるホテヴィラ村で、現在はホピの祭祀はホテヴィラ村が維持し、ホピの象徴的役割を持っている。これ以外にも別の集落があるが、ほとんどの集落では、現代的な生き方を取り入れていない。しかし若い者達の中には現代のメディアの影響を受けて、安楽を求める方向に向かっているものも多くいる。ここが最後の砦になるかも知れない」と言っ

た。

周囲に小高い丘があり、賢にはこの空間が、他の地域から孤立しているように思えたが、ホピのそういう生き方が、厭世的な逃避の姿には見えなかった。どこかで、空や森、そして生き物達と繋がっているように感じた。

そこを辞して、5人はホテヴィラ村に向かった。ホテヴィラは大きな村だった。午後、ここで祭りを見せてもらえることになっている。4人は、どこで執り行われるのか興味深深だった。ホテヴィラ村を後にすると、一行は一旦もと来た道に戻り、第2メサに向かった。下り坂では急峻な崖をすべり降りるような心境を覚えた。第3メサから降り、少し走ってから今度は第2メサを上ったのだが、その勾配は更に急で「ローギアードでないと危険だ」とリチャードが言った。確かに、よじ登っているような感覚を覚える。坂を上り切ると第2メサには少し行ったところにホピのカルチュラル・センターがある。賢たちはそこでホピの生活習慣についての展示を見た。統一した行政府の元でホピに便利で快適な生活をもたらそうとするアメリカの政策に抵抗するかのよう、村全体を統制するホピ独自の組織を作っている。村々がそれぞれ自分達流の国家的運営の形態を作り、簡素な生活を持続している。どうしてそんなことができるのか、何がホピの人たちをそこまでさせるのか、賢にはよく理解できなかった。預言は確かに、強力な羅針盤になる。しかし、長い年月の間には、預言と啓示の示す指針を遵守するための自己統制は、その方向性が不明確になり、自然に希薄化するものだ。賢はもう少し詳しく知りたいと思った。カルチュラル・センターの展示の中に、マサウウからのメッセージに附いて書かれたものがあつた。そこにはこう書いてある。

「お前たちがわたしと同じように生きたいと願うなら、そしてわたしの定めーわたしが与えるライフ・プランーに従うならば、おまえたちはここでわたしと共に生き、大地の面倒をみながら、永く幸福で実りの多い人生を送ることができよう」

そして、そのライフ・プランは聖なる石版に線画として刻まれていると書かれている。マサウウがその気の力で刻み込んだと記されていた。こ

の石板は「熊」氏族と「火」氏族に代々伝承されてきている。それはすなわち、マサウウがホピ文化の基礎を築いた上でのことだということを意味している。もう一つ面白い記載があった。それはホピの神話に蜘蛛女と呼ばれる重要な存在がいることだ。蜘蛛女は蜘蛛のおばばとも呼ばれ「善き母親」の化身であり、正義、善なるものの全て、さらにはこの世の全知識の権化だということである。人間の住みやすい世界を創造するのに協力した女神であり、ホピの人間が新しい発見や発明をするように働きかける原動力になっている。祖母のような愛情でホピを支えてくれているが、彼女が特に気に掛けているのは、ポカングホヤとパロンガウホヤという二人の孫息子で、蜘蛛女は、このたけだけしい戦争の2神が邪悪な力や悪霊や、邪悪な考えに屈服しないように見守り、援けているのだという。賢はこの蜘蛛女がホピの預言の謎を解く鍵かもしれないと思った。それによって、ホピの宇宙観が理解できるかもしれないと思った。ホピの考える宇宙は、全ての現実が蜘蛛の巣のように絡み合っていて、蜘蛛はその巣を自分自身の体から紡ぎ出す。つまり、蜘蛛女とは、被造物からかけ離れた超越的な創造の神としての存在ではなく、絶えず変化し、発展している宇宙に内在するエーテル、すなわちエネルギーとそれにより現れるパワーを暗示しているのではないか、と思った。蜘蛛女の二人の孫は地球の両極にがんばっていて、地球が規則正しく回転するように地軸のバランスを保っている。二人が手を抜くと、バランスが崩れて地震などの異常現象が起きるのだ。この双子は宇宙のバランスという根本概念を擬人化して説明している。このような霊的エネルギーの化身たちは人間を助けてくれる存在であり、その暗示するところは分かりやすいが、ホピの神話に語られるタイオワ神は理解するのが難しい。創造神であるタイオワは宇宙開闢の頃から存在する霊の本質で、まだ、空間も時間も無かった頃の原初の原因となった存在だ。この神を通じて宇宙の秩序を作り出すパワー、ソツクナングが出現している。ホピの宇宙観では、宇宙を複雑なネットワークとみなしている。自然の物理的にかつ霊的な力とエネルギーが織り成す複雑なネットワークなのだ。この力とエネルギーのバランスが取れていることが、その存在を維持する絶

対条件だ。このバランスが崩れると、地球上の存在物は絶滅してしまう。この巨大な構造物の一部に、もし歪が生じたら、それを修復しなければならない。それによって、宇宙のバランスを回復することが必要なのだ。ホピは宇宙のバランスを維持回復することが彼らの使命だと信じている。その仕事を違わずに果たすためには、聖なる儀式を行い、常に創造神の意思に服従することを誓い、大神霊によって示された啓示に従い、正しく、平和な人生を送っている必要があるのだ。賢は展示に記されたこれらの説明を読んで、ホピがその生活様式を変えようとしないう理由をやっと納得できた。この神話が自分の考えているこの「世界を写像と見る概念」とどう対応するか賢は考えてみることにした。梓が言った。

「リーダーの考える、わたくし達の元にある核って、ホピの人たちの創造神、タイオワと同じ存在なのかしら？」

「タイオワもカバラでいう非存在アイン・ソフから生み出される無限光アイン・ソフ・オールを擬人化した姿と見るのと同じじゃないかと思う。僕の考える写像の元にある本来の自分自身は、アイン・ソフと同じような概念になると思う。だから、タイオワの元にあるものが写像の元だと思う」

「概念で捉えるのは難しいです。昨日、ポイントン・キャニョンのパワースポットで見た、あの無限に広がるような世界、あの中に全てが含まれているのが分かった、あの世界がタイオワなのかしら？その世界がアイン・ソフなのですね？」

「いや、僕達が昨日見たのは具体的な光となったアイン・ソフ・オールの映像だと思う。あれを観ると、それを言葉でどう表現したらいいか分からない、そういう存在だね」

「あの、映像のようなものなのですね。あの映像だって、あまりに広大無辺で表現のしようが無いでしょう。それなのに、更にその元と謂うことになる、もう考えることもできないです」

「ううん、そんなに難しいものではないと思うよ。僕達は这个世界に生きているだろう。一見这个世界が全てで、他には何もないように見えるだろう。ところがその本質は、昨日見たようにもっと多次元に重なった

ものだと分かっただろう。つまり、その多次元世界が、アイン・ソフ・オール即ちタイオワの本体だと思う。我々には全ての姿を見せていない……いや、我々がそれを見る力を失っているだけで、まさに、それがこの世界の本当の姿だと思うよ」

その話を聞いた亜希子が言った。

「わたくしは、昨日のような、あんな世界の姿を観たのは初めてです。でも、あれから何度か瞑想してみましたが、あの変わった世界の姿は観ることができませんでした。あれは、あなたがいらしたから、わたくし達にもあの世界の姿が見えたのではないのでしょうか？」

愛子も言った。

「賢パパ、わたしもそう。もう一度観てみたいと思って、何度も瞑想をしてみたけど駄目だった。あれは観ているというより、感じているって言ったほうがぴったりだった。どうしたら、もう一度見ることもできるのかなあ？」

「僕はね、子供の頃から何度かああいう場面に出会ってきたんだ。だけどその頃は、何がなんだかよく分からなくて、「自分が可笑しくなってしまった」って思っていたんだ。子供のまだ発達していない脳味噌じゃ、認識できなかったんだね。僕は、本当の世界の姿を、どうやったら観られるか分かってきたよ。それはね、スイッチだよ。スイッチを入れればいいんだ。だけど、スイッチが入って、あの世界が見えても、それを受け取れる状態じゃないと、ただ、混乱するだけだけどね。準備のできていない人がそういう情報をキャッチして、ずっとその状態にいと、発狂してしまうかもしれないね」

梓が言った。

「わたくしもそう思います。実際、わたくし、どう考えたらいいのか混乱してしまいました。あの世界は多重というより、自分の意識で変化する世界とでも言ったら良いのかも知れません。わたくしは暫くの間、楽しんだのですよ。カンボジアの上空を飛んでいる飛行機の片方のエンジンが停止してしまって、緊急着陸をしようとしたんだけど、着陸できる場所が無かったんです。わたくしは、飛行機が墜落するのを見ているの

は嫌だと思いました。そのとき、不思議なことに大勢の人たちが、墜落するのは嫌だと思っているのを感じました。どうやら、それは飛行機に乗っている人たちだったようです。他にその状態を見ていた人は居ないようでしたから。それでも、じっと飛行機の運航を見つめていました。気が附くと、さっきまで蛇行していた飛行機が正常に戻っていたのです。しかも、停止していたエンジンが何事も無かったかのように動いていました。その飛行機は無事プノンペン国際空港に着陸しました。大勢の人たちが出迎えに来ているようでした。誰もエンジントラブルのことは気にしていないようでした。それで、わたしはまたその飛行機の飛んでいる状態に視点を移してみたのです。不思議なことに、たった今着陸したはずの飛行機がまだ飛んでいました。蛇行しています。何人かの人が悲痛な叫びを上げています。皆、もう駄目だと思っているようでした。飛行機は機体の飛行姿勢を正常に保てなくなって、森に向かって下降してゆきました。わたくしはその直後に来るはずの光景を見たくありませんでした。そして、飛行機が着陸した後を観ようと意識しました。やはり、飛行機は墜落していました。森林にその残骸が散らばり、森林の一部に火の手が上がり、機体もその炎の中に炎上していました。わたくしは意識をエンジンが停止した直後に戻しました。飛行に搭乗している人たちは皆、エンジンが正常になればいいと思っていました。ほとんど全員がそう思っているようでした。そのとき飛行機が大きく揺れました。女性達の悲鳴が聞こえました。中には男性の悲鳴も混じっていました。飛行機が揺れた後、みんなの意識は、「もしかしたら、墜落するかもしれない」という意識がほとんどになりました。中にはまだ、エンジンが正常に復帰することを信じている人も居ました。しかし、みんなの意識は次第に墜落するという方向に向かっていました。そして、遺書を書き出したり、神様に祈りを捧げたり、携帯電話を取り出して誰かに電話をする人も現れました。天井からは救命用のマスクが降りてきています。そのとき、わたくしは分かりました。この世界の現れは、自分達の意識が作り出していることを。そこで、わたくしは飛行機に乗っている人たち全員に、メッセージを送りました。「飛行機が無事着陸すると思いなさい！

墜落すると思っではいけません。あなた方は助かります。一瞬先の未来に対しても、決して不安を抱いてはいけません。飛行機は無事着陸します！」・・・そう強い意識で語り掛けたのです。一人の女性が反応しました。

「御仏からのお告げがあったわ。わたくし達は助かるって。だから、墜落のことを考えないで、無事着陸することを考えなさいって」

そしたら、「わたしにもあった」「俺にもあった」と大騒ぎになり、全員が、両手を合わせて祈るようなポーズを取ったのです。それからどうなったと思いますか？停止していたエンジンが急に噴射を始めました。飛行機は無事に着陸したのです。わたくしが見ていた世界はあらゆる選択肢をわたくし達にゆだねてくださっている世界だということに気付いたのです。飛行機が着陸した後、空港には消防車や、救急車が来ていました。空港にある他の飛行機は全て退避していて、滑走路は開いていました。飛行機は悠々と着陸しました。乗客は皆、喜々としてタラップを降りて来ました。乗客の家族や、知人など出迎えの人たちで一杯でした。乗客と出迎えの人たちは抱き合ったり、肩を叩きあったりして、無事の着陸を喜び合っていました。なんと不思議なことでしょう。初めに正常に着陸した飛行機と、危機から脱して着陸した飛行機との間には、乗客の意識の変化以外に何等相違は無かったのです」

梓は、自分の見た高次元世界の場面を説明して、意識の持ち方によって世界は変わるようだと行った。賢は言った。

「梓の観た世界は、この世界の元の世界から、梓自身が導き出した、映像だ。それは、一旦3次元世界に映し出された写像をフィードバックしたものだ。本当の元の世界は全く何も無い、空気のようなもので、時間も空間も無いものだ。ある意識を持った目でその元の世界を観察すると、梓が見たような映像が現れるはずだ」

梓は、賢の言葉に疑問を感じたようだった。

「リーダー、そうだとすると、何か可笑しいような気がします。何も無いところから、どうして、世界が映し出されるのか分かりません」

「そこが難しいところだ。人間の意識は、既にこの文明を作り上げた知

恵が支えている。だから、現在の世界の様相に合った形の写像が作り出されるのだ。この段階に至るまでに、ゆらぎから、次第に分子の運動、初期の意識の作用、生命の誕生から人類の誕生、そして社会への展開と発展しただろう。生命の誕生から人類の誕生に至る段階で、人間は意識を与えられる。その意識で最初は生きることのみ意識を働かせていたが、次第に生活の形が出来、知恵が発達し、それが再び意識に反映して、結果として、この世界を形作る意識を構成するようになったんだ。だから、昨日観た高次元の世界では、この現代のどこを切ってみても、金太郎飴と同じように、ほとんど似たような世界が現れるんだ。それが元の世界の写像についての真相だと思う」

愛子が言った。

「それじゃ、人間が自由意志で世界をつくることができるとしたら、どうして、貧困に苦しむ人のいない世界が出来ないのかしら？」

「その質問は前にも聞いた覚えがあるな。つまりは、人間の意識が貧富の差や、戦ってでもよりよいものを得ようとするエゴの心を手放していないからだと思うよ」

愛子が言った。

「賢パパ、もし、人々の意識の持ち方で、別の世界が現れるんだとしたら、わたし達は何時だってこの空間から好きなものを取り出せるんじゃないかしら？」

幾分皮肉ったような愛子の言い方に、賢は笑いながら言った。

「そう、その通りだと思うよ。僕らはそのことに気付いていないだけだと思う。そういうことを行う機能のスイッチをOFFしてあるんだと思うよ。ONすれば、できるようになるんだと思う」

まさか、賢が、愛子の言うように空中から好きなものを取り出せるなんて言うとは思っていなかった愛子は、目をくりくりさせている。亜希子が言った。

「あなた、わたくしたちが消えたり、現れたりしたことと、同じことなのかしら？」

「それとは、ちょっと違うと思う。今の愛子の話は物質化現象の話だ。

それを行えた有名な人間はインドのサイババかな。もう亡くなってしまったから、よく知られた人でそういうことのできる人はいなくなってしまったけどね。だけど実際は、誰にでもできるんだ。DNAにあるスイッチをONにできさえすればね。それが現代では、その方法が忘れ去られているから、物質化を行う人を見ると、やれ神様だとか、やれ軌跡だとか、手品師だとか言って大騒ぎになるんだ。元々、誰にでもできるようになっているのにな」

梓が言った。

「リーダー、それは量子の世界の話でなくて、この生活空間での物質のことですか？たとえば鉛筆とか、お皿とか……」

「ああ、そうだ。果物でも、機械でも、何でもね」

「凄いですね。でも、実際それを見ても信じられないわ」

梓の疑念はまだ拭えていないようだった。

「僕はね、昨日のあの空中浮揚のときから、自分の中にあるスイッチのON/OFFの方法を思い出したようなんだ。言葉で表現するのは難しいけどね。一寸、君達の前で試してみようか？」

愛子が目をますますくりくりさせて言った。

「うん、お願い。何か出して見せて」

「分かった。多分できると思う。愛子、何を出そうか？」

「えっ？本当にできるの、じゃあ、日本の桃を出してみせて。あれなら、ここには無いから、本当だと分かるでしょう」

「分かった。やってみるよ」

賢は名目して、意識を自分の眉間の内側に集中させた。賢は身動き一つせずに、内観（ないかん）を続けた。聞こえるのはエンジン音だけになった。そのエンジン音も次第に賢の耳には聞こえなくなり、自分が自動車の中に居ることも意識の外に置かれた。その状態が5分間ほど続いた。賢は上に向けた右手の掌の上に、よく熟れた桃が存在しているという認識を作った。そしてその認識がはっきりしてくるまで、意識の集中を維持した。賢の目には既に掌の上にピンク色の直径10センチ近い桃が載っている。それから1分ほどして愛子が叫んだ。

「賢パパ、出た出た、桃が出たよ！すごーい！」

梓も亜希子も驚きの声を上げた。リチャードは何事が起きたのかと、室内バックミラーで賢の姿を観た。しかし、賢は瞑目している。リチャードは賢の右掌に桃が載っているのには気付かない。視線を路上に戻しながら言った。

「What's happened?」（どうしたの?）

梓が応えた。

「A peach appeared on his hand.」（彼の手に桃が現れたの）

「Where did he get it?」（それどこで手に入れたの?）

「He materialized it now.」（彼が今物質化したのよ）

「Materialize?」（物質化?）

リチャードは訳が分からないとでも言うように両肩を軽く上げて見せた。賢が漸く瞑目を解いた。

「どうやら、できたようだね。」

愛子が言った。

「ねえ、ねえ、賢パパ、どうやったの? どうやれば出てくるの?」

「愛子、これは本当に誰にでもできることだよ。だけど、まず、これができるということを完全に理解していて、自分として全く自然なことだという意識状態でなければならない。それが意外に難しいかもしれない。「石に矢の立つためしあり」って言うだろう。あれだよ。後は、出そうと思うものを、集中して出すのじゃなくて、出てくるところを具体的にイメージして、それが現実だと認識することかな? まあ、僕にはそんなに難しいことじゃないけどね」

「賢パパ、難しいよ。わたしなんか、できっこないわ」

「わたくしも無理だと思います」

愛子と梓は否定的だった。しかし亜希子は違った。

「あなたがおできになるとおっしゃるのですから、わたくしは自分にもできるような気がしてまいりました」

「そう、亜希子のような感覚じゃないと駄目だ。じゃ、ちょっとコーラを出してみないか?」

亜希子は返事をして、賢のやったのと同じように瞑想し、物質化を意図したが、何も現れなかった。亜希子はがっかりした。賢は「自分がやろう」と言うと、3人の女性に両手の掌を上に向けてじっとしているように言ってから瞑目した。5分ほどして、3人の掌に冷たいコーラの缶が現れた。

「ひえーっ！」

愛子が嬌声を上げた。梓と亜希子も驚きの声を上げた。賢は愛子の掌からコーラの缶を一缶取るとリチャードにそれを渡しながらか言った。

「Here you are. It's a pop. It's cold, isn't it.」(はいこれ、ポップだよ。冷たいだろう)

「Ken, How did you get it?」(賢、どうやって手に入れた?)

「It's a gift from Masauu, the God of Hopi.」(ホピの神マサウウからのプレゼントだよ)

「You are kidding.」(冗談言って)

そう言いながらもリチャードは肘でハンドルを押さえながら、うまくコーラの缶を開け、ごくりと呑んだ。リチャードが一口飲むと、全員缶を開けた。強い日差しの中を歩いてきたので、女性達の喉にコーラが沁みた。賢は栓を抜いたコーラの缶をじっと見つめている。そして、頭に附いている木の葉を振り払うように首を左右に振った。

カチナダンスは4人を幻想の世界に引き込んだ。リチャードは車の中で待たなければならなかった。観ることを許されなかった。4人は車から降りると、今朝の長老に祭り場に案内され、ホピの観客の中心に設けられた特別席のような場所—とは言っても、ただ、他に比べきれいな敷物が敷いてあるだけだが、そこに案内された。一人の長老が火の附いたキセルのようなものを賢のところに持って来て、順に吸うように手招きした。踊り手はトランス状態に入っているようだった。彼らがホピ種族以外の者の前で、このダンスを踊るのはこれが初めてだと言った。賢は最初にキセルを吸った。意識が一気に広がってゆくような感覚がした。頭の中に総天然色の絵模様が描かれ、それが回転し始めた。賢は煙を吐き出すと、意識をしっかりと持つように自分に言い聞かせてからキセルを亜

希子に渡した。亜希子はそれを少しだけ吸ってから息を吐き出すと、梓に渡した。梓は興味半分に少し強く吸い込んだ。目が回ったように手前によろけそうになったのを愛子に支えられた。漸く姿勢を元に戻すと、梓はキセルを、自分を支えてくれている愛子に渡した。愛子はほんの少し吸って息を吐き出した。キセルは愛子から長老に戻された。亜希子と愛子はあまり吸い込まなかったが、長老はそれでも満足したようで、キセルを持って元の場所に戻って行った。賢は目の前で展開されているカチナダンスの中に引き込まれてゆく自分を感じた。天にも昇るような恍惚とした気分で、人々の中で踊った。亜希子も梓も、愛子も共に踊った。地面を蹴るような踊りだった。テンポが次第に速くなり、踊り手も恍惚として踊っているのが分かる。やがて空から光が降りて来た。その光がダンスを踊っているものたちに降り注がれた。1時間近く踊り続けて、気が附くと賢は元の自分の席に座っていた。3人の女性達も元の席に座っている。長老がやって来て、4人にダンスが終了したことを告げた。既に踊り手の姿は無かった。長老が「あれは精霊が踊ったのです。神々も共に踊っていたのですよ。このダンスは皆さんの歓迎のためのダンスで、部族の中でも初めて踊られたのです」と言った。時間は短かったが、賢は自分達が歓迎され、祝福されているのを肌で感じた。3人の女性はなぜか知らず喜びに打ち震えている自分達を感じていた。それは精霊と一体になった感覚とでもいうものだった。特に梓は感動して涙を流していた。

4人はフェニックス発の成田直行便の中に居た。今回の出張は賢の遠慮もあって、エコノミークラスを使った。藤代は亜希子が同行することもあり、ビジネスクラスで行くように何度も言ったが、賢は、自分の意向での出張なので、経費を抑えたいと言った。藤代は漸く了解した。エコノミークラスの唯一のメリットは親しい人と隣通しになると、凄く密着できる点だ。他の人とも近接してしまうが、それさえ気にしなければ、友人や恋人同士なら、狭い場所で姿勢を変えるとき、相手に身を寄せるようにすることができる。4人は後方の1列に並んだ席を選んだ。左側

から亜希子、賢、愛子、梓と並んだ。アフリカからフェニックスに移動する時は、カサブランカ、パリ、ロスアンゼルスと3回の乗り換えで疲労が重なり、ゆっくりすることはできなかったが、帰国の便は4人をやっと開放感に浸らせてくれた。愛子は賢と並んで座ると、はしゃぐように言った。

「賢パパ、わたし、超能力が身に附いたのかしら？今もあの、体が空中に浮いたときの感触を覚えている。それに時々からだがふわつとなるのを感じるの」

「うん、少なくとも以前より、そういう能力を使える可能性は高まっているんじゃないかな？口笛みたいなものだよ。あれだって、初めは音を出そうとしても、どうやっても出ないだろう、だけど、一旦吹けるようになれば、面白いように好きな音を出せるだろう。超能力だって、そんなものだと思うよ」

「あの時は賢パパがわたし達を誘導してくれたんでしょう。今でも、賢パパに触ってもらえば、ああいうのできるのかな？」

「愛子、触れなくても、僕達には共通の場が出来ているように思うよ。だから、意識さえ集中できれば、ああいうことは今でもできるはずだよ。今回の出張は、いろいろなことを経験して、精神的にも結構疲れているだろう、どうだろう、こうしてみないか？この狭い席を居間の様に広い空間に変えるんだ。ほんの13時間ほどの間だけどね。どうだ、3人もいいだろう？」

梓と亜希子は勿論と言うかのように頷いた。愛子も拍手をして喜んだ。飛行機が離陸体制に入り、シートベルトを締めるようにアナウンスがあった。エコノミークラスなので、特にサービスがあるわけではない。賢は3人の女性に「この現実とミックスさせるから、サービスされるものはそのまま受け取ってね」と言った。賢が、女性達に半眼になるように言うと、3人とも静かに目を閉じた。賢は半眼の状態、瞑想状態に入った。賢の意識は別次元の空間に広い居間を創り出した。そこにはゆったりとした大き目の椅子が並んで置かれていて、4人がこの飛行機の席と同じ順番に座っている。4人の前には大きなテーブルがあり、その

中央に赤いバラの花が2, 30本ほど花瓶に生けて飾られている。賢は時々通り過ぎるスチュワーデスが美しいブルーのワンピースの上に純白なレースの衣装を身に着けた、女性であることに決めた。賢が席を立つときは亜希子が、愛子が席を立つときは梓と一緒に立つということに決めて、そのイメージを3人に送った。

「今から、居間のイメージを送るからね。皆、暫くはそこに居るんだよ。食事や、そのほかのサービスのときは、自分で好きなものをイメージして、それがサービスされているって意識するんだよ。いいね。それじゃこれから、成田に到着するまで、まったり寛ごう」

賢がイメージを送ると、3人の女性は半眼になって賢の創った居間の中に寛いだ。暫くの間、4人とも瞑想していたが、やがて、スチュワーデスがタオルを持って来た。賢は亜希子に次いでそのタオルを受け取った、亜希子のタオルに対するイメージが、受け取ったタオルを芳香を含ませたピンク色の手拭きに変えた。賢も同じ感覚でそれを受け取った。暫くすると梓と愛子に別の女性がタオルを持って来た。梓の作ったイメージは、薄い水色のタオルだった。愛子もそれに同調した。手を拭うと4人は揃ってテーブルを下ろした。その動作はイメージに変換しなかった。そしてタオルをテーブルの上に置くと、やがてスチュワーデスがタオルを回収に来た。賢は

「Thank you very much.」(ありがとう)

と言った。3人の女性も同じように言った。スチュワーデスが、急に体を後ろにのけぞらせて、

「Oh my God!」(あら、大変!)

と声を抑えて言った。亜希子、賢のタオルを回収し、愛子のタオルに手を伸ばそうとしたとき、タオルが宙に浮いて、フワッとスチュワーデスの手の上に載ったのだった。スチュワーデスは辺りをきょろきょろ見ながら、愛子のタオルを回収籠に入れ、梓のタオルはそのままにして、次の列に移って行った。スチュワーデスは自分の感覚が可笑しいと思ったようだった。しかし、何も無かったようなポーズで、まだ半眼でいる愛子の方を見つめながら、次の列の乗客のタオルを回収していた。一見、

4人は他の客と何も変わらなかった。愛子が言った。

「賢パパ、タオル、宙を飛ばせられたわ」

賢が言った。

「愛子、実験はそれまでだよ。皆がびっくりしてしまうからね。ところで、皆今度の旅行は、いろいろな体験が出来て素晴らしかったな。アフリカと云い、アメリカと云い、予想外の成果があったな」

亜希子がそれに応えた。

「あなた、わたくし、セドナで封印した感情を解放させていただいてもよろしいでしょうか？」

「勿論だ。だけど、自分で感情の起伏を制御できるね」

「はい、大丈夫です。わたくしはアフリカで直ぐ近くにまで行っているが、お会いできなかった祐子お姉さまのことが、また心を占領してしまいました。悲しみが込み上げてきています」

半眼の亜希子の顔が見る見る暗く沈んでいった。梓が言った。

「リーダー、いいえ、賢さん、わたくしはこの旅行が、会社の任務以上の成果を挙げたと考えています。特にわたくし自身、今までの生き方全体について見方を変えなくてはならないと感じています。まず、祐子さんのことですが、確かにお会いできなかったという無念さがありますが、それはあの方がわたくし達に、いいえ、特にあなたに会うのを躊躇されていたことが主な原因だと思うのです。あの方には何か、会えない事情があったのだと思います。でも、わたくし達は、あの方をお救いできるところまで行きました。わたくしはあの方が、わたくし達に会うより、もっと大切なことのため、あそこに留まることを決意していたような気がいたします。その事実から、あの方の選ばれた道、まるで、天使のような美しく輝く道を、わたくし達に実際にお示しになったということ、わたくし達が、今の生活を維持するより、もっと大切なものがあるということを知ることができたということ、それだけで今回の旅行は十分意味があったと思います。そして、その次に訪れたドゴンの村、あれは他にもない、わたくし達が忘れ去っている世界だと思います。今回のプロジェクトの目指すところは人類の意識の改革ですから、本来的な意識に

近づくためにも、ドゴン族の伝承のように、シリウス星からノンモが来て、人間が創造されたすぐ後のような人間の本来の意識に立ち返ること、これまで積み上げてきたさまざまな経験を知恵に変えること、これができるプロジェクトの目的も達成されると思います。それから、ホピですが、わたくしはあの預言より、あのパワースポットでの体験の方が、ずっと自分に変化をもたらしたと思っています。わたくしには皆さんのような超常的な体験はありませんでしたが、この経験を通して、自分がこの肉体だけの存在じゃないことを実感として理解いたしました。帰国したら、これからの人生、生き方を改めてゆくつもりです」

梓は実際の言葉として話してはいなかったが、他の3人は広い居間で、寛ぎながら話す梓の姿を見つめ、その澄んだ声を聞いていた。スチュワードスが食事を用意してきた。賢はその料理が豪華なステーキであると意識に伝えた。そして、それを全員に話した。賢の定義したそのステーキは、アメリカのテキサス州フォートワースにあるゴッグというレストランで食べた経験のある、フィレミグノンとサラダだった。賢はスチュワードスに赤ワインを頼んだ。女性達も皆それに習った。スチュワードスは少し微笑んだが、4人のテーブルの上に食事を載せると、愛想よさそうにミニボトルを開け、グラスにワインを注いでくれた。賢にはそれが、先ほどの美しい女性によるサービスに見えた。3人の女性にもそのように見えた。4人は広々とした居間で、ゆったりとした椅子に腰掛け、最上のステーキを食べた。食事が済むと、銘々コーヒーを注文した。コーヒーを飲み終える頃にスチュワードスが4人のトレイをほぼ同時に片付けてくれた。賢の提案で、全員が睡眠を摂ることにした。4人は同時に席を立ち、トイレに向かった。それは傍から見ると異様に見えたが、賢たちにとっては自然なことだった。トイレも、広々としていて、落ち着いた雰囲気の個室だった。食事後に直ぐだったので、トイレは混んでいなく、直ぐに済ますことができ順次席に戻れた。もう4人にはそこは飛行機の中ではなく、広い居間だった。あらゆるものが穏やかで、4人の為に用意されていた。4人は座席に座ると、ブランケットを身体に掛けた。愛子がブランケットの下で賢の左手を握った。賢も静かに握り

返した。賢は右手で亜希子の左手をまさぐり、手を自分の方に導いて、握った。亜希子は悲しそうな雰囲気を感じさせたが、賢のその行動で、身体を賢の方に寄せた。梓はそれには気付かずにそのまま瞑目した。機内放送で4人は目が覚めた。あと1時間ほどで着陸すると言っていた。4人は現実の意識に戻ることにした。

丸の内

入国審査を通り、荷物を持ってEXITを出ると、原と藤代登紀子が待っていた。

「みなさん、お帰りなさいませ。良かったですわ、皆さんがご無事で。わたくしとっても嬉しいですわ」

賢が代表して言った。

「奥様、お出迎えいただき、ありがとうございます。残念ながら、祐子さんをお連れすることはできませんでした。でも、祐子さんはご無事でいらっしやいます。・・・原さん、ご苦労さまでした。大変だったでしょう」

「お帰りなさい、賢さん、皆さん。本当のところほっとしました。愛子さん、大丈夫でしたか？」

「ええ、大丈夫。原さん、どうして、わたくしだけ心配するの？未熟者だからね？」

皆笑った。

「いいえ、愛子さんは初めての海外渡航でしょう。さぞ、大変だったろうと思って・・・」

「ほら、やっぱりわたしを子ども扱いしている。大丈夫よ！」

また、皆笑った。歩きながら愛子は原に向かって話し掛ける。

「ねえ、ねえ、わたし、ビッグパパとママの前で踊ったのよ。ほら、あのいつもの場面よ・・・」

原は愛子の話に、いちいち頷きながら歩いた。登紀子はリムジンを待たせてあった。送迎車のアプローチに運転手が車から降りて待っていた。

運転手は手際よく全員の荷物を積み込み、4人にドアを開けてエスコートしてから、運転席に乗り込んだ。登紀子が言った。

「皆さん、お疲れでしょう。お宅にお帰りになる前に、少し休んで参りましょう。里深さん、赤坂に行ってくださいる？」

「はい、奥様」

亜希子は青山の家には帰りたがらない。それが分かっているのだから、登紀子は家の近くのレストランに4人を連れて行くことに決めていた。亜希子が言った。

「おかあさま、皆さんも、わたくしも早く自宅に戻りたいと思っています。寛げるところで……」

「そうね。わたくしにも分かっているわ。でも、皆様のお疲れをねぎらわせていただきたいのよ」

賢が間に入った。

「亜希子さん、お母さんの好意に甘えさせていただきましょう。いくら広い居間に居たからといって、最後の1時間は窮屈だったでしょう。休ませていただきますよ。」

亜希子はしぶしぶ頷いた。登紀子は賢の言ったことの意味が分からなかった。

「飛行機はファーストクラスで帰ってこられたのですか？広い居間というの？」

「いいえ、エコノミークラスです。でも、意識でファーストクラスよりもっと広い空間に居ました。着陸1時間前から元のエコノミークラスに戻りました。」

「ああ、そういうことだったのですね。気分だけはファーストクラスでお帰りになったのですわね」

賢は、詳しくは説明しなかった。登紀子は九州で賢と亜希子の帰還に立ち会ったとき、意識の世界を垣間見ていたので、自分にも理解できると言いたいようだった。ホテルのレストランは空いていた。ウェイターが登紀子の姿を観ると、近づいてきて丁寧に挨拶した。一番奥の大きな正方形のテーブルの席に案内された。

「わたくしがお食事を選ばせていただきましたけれど、よろしいかしら？」

全員頷いた。フランス料理のコースだった。入り口からウエイターに案内されて藤代肇が入って来た。

「やあ、お帰りなさい。わたしも一緒させていただきます。よろしいですか？」

賢は「勿論です」と言った。亜希子は下を向いていて、自分の父親の顔を見ようとしなかった。梓はゆっくり頭を下げた。賢は藤代に原を紹介した。原はびよこんと頭を下げただけだったが、藤代は原の顔をまじまじと見て言った。

「原さんは、内観さんのともだちとうかがいましたが、今、何をされているのですか？」

「今は、フリーターです。少し前まで、御社で派遣社員として働いていました」

「どうして、辞められたのですか？何か当社に不手際があったのでしょうか？」

「いいえ、そういう訳では……」

登紀子が間に入った。

「あなた、皆さんお疲れのようですから……」

シェフが挨拶に来て、それから順次料理が運ばれてきた。皆、藤代に促されて食事を始めたが、寡黙だった。賢が緊張を和らげるために言った。

「残念ながら、祐子さんをお連れすることはできませんでした。調査の方はアフリカのドゴン族とアメリカのホピ族を調べましたが、いずれも古の預言に基づいた考え方と、それに基づいた生活様式を維持していて、非常にシンプルで瞑想的な生活を営んでいました」

「祐子のことは、残念だったが、仕方がない。わたしも捜査を続けているが、どうやら中央アフリカに居るようだ。あのあたりはよく紛争のある場所だから、慎重にならざるを得ない。祐子の問題は別に考えることにして、ドゴン族とホピ族の調査はそれほど重要な鍵を握っているのかな？」

「はい、人の意識は、一朝一夕に変えられるものじゃないと思うのです。彼らの生き方の中に今度のプロジェクトの実施内容に附いてのヒントがあると思っています」

「うむ、しかし、ドゴンやホピのやり方じゃ、時間がかかるしな……ところで、田辺君、君の感想はどうだね？」

「はい、社長、わたくしは今まで物質至上主義の中で生きてきて、自分自身もそうだったのですが、今度の出張で、その生き方に対して疑問を感じるようになりました。あの二つの種族の長老さんたちのおっしゃったことのうちのいくつかの内容は、今度のプロジェクトで有効だと思います」

「ほうほう、それはたとえばどんなこと？」

「はい、例えば、彼らの創造神が伝えた内容の中に、地球環境は、創造神とその意思を実行するものたちの愛の念に基づいて創られたという考えがあるのですが、この無限にあるとも思える地球のさまざまな存在が、全て創造されたものだということを受け入れると、自然に、感謝の念が湧き上がってきます。意識の改革のためには、感謝と愛の心が必要です。このようなことを国民に伝える方法が大切だと思いました」

「うむ、創造神の愛ね、君も大分、内観君に感化されてきたようだな。はっはっはっはっは……ところで、原さん、あなたはこういう考えをどう思いますか？」

「ぼくは、創造神も自分も同じだと思っています。全て、自分が創ったものだと思っています」

「そうですか……」

藤代はそれ以上質問しなかった。

「亜希子、今日は家に帰ってきなさい。お母さんが寂しそうで、かわいそうだよ」

亜希子はうつむいたまま言った。

「いいえ、お父さま、わたくしは家には戻りません。わたくしの住まいはあのマンションです。皆さんと一緒の場所に帰ります」

「亜希子さん、今日は家に戻って欲しいのよ」

「ごめんなさい、お母さま、わたくしは戻りません」
場が少し白けた。それからは皆、無言で食事を済ませた。
先ず、鶯谷のアパートに梓を送ってもらってから、他の者は賢のマンションに帰った。9時半を回っていた。全員疲れていた。原は暇乞いをする、そこから自分のアパートに戻って行った。3人は先ず麻子の位牌の前で祈りを捧げてから、賢、次に亜希子、それから愛子の順でシャワーを浴びた。愛子が浴室に消えると、ソファーに掛けている賢の横にバスローブに身を包んだ亜希子が寄り添って座った。亜希子は小さな声で、囁くように言った。

「あなた、わたくしを抱きしめてください。わたくしの悲しみを、あなたの愛で遠ざけてください」

賢は、亜希子を抱き寄せて、口付けをした。硬くなっていた亜希子の身体は、途端に筋金を外されたように、ガクッとやわらかく崩れ、賢の胸に抱きとめられた。賢はソファーの長椅子に亜希子を押し倒すようにして、亜希子の唇を求めた。愛子が浴室の引き戸を引く「ガタッ」という音にふたりは跳ね起きた。亜希子はバスローブの襟を直した。

「ああ、気持ちよかった。フランス料理のフルコースなんて、はじめて頂いたでしょう。緊張して疲れちゃった」

愛子はパジャマを着て、ふたりの居るソファーのところに来ると、賢に訊いた。

「ねえ、賢パパ、あの飛行機の中のこと、あの広い居間の事だけど、あれはどうやったの？現実のここのようだったわ」

亜希子も今の自分の行為を隠すように言った。

「あなた、わたくしにも教えていただけますか？あのようなことができるのであれば、人々の苦しみも無くなってしまいますわ」

「そうだね。あれは、普通はできない方がいいね。この地球上に生きている意味が無くなってしまふからね。愛子の疑問にはまだ答えないほうがいいと思う。ときどきやってみせるから、きっと、だんだん分かってくると思うよ」

愛子は諦めた。この日は賢が寝室で休み、二人の女性は出張前に居間に

設置した二つのシングルベッドで休むことになった。賢が寝室で休むことは、翌日の会議に支障をきたしてはならないからとの理由で、亜希子が奨めたのだ。賢はスーツケースから調査資料だけを取り出して、ビジネスバッグに詰めると、寝室に入って行った。二人の女性は荷物の片付けは翌日にすることにして、直ぐにベッドに入った。賢は直ぐに眠りに落ちたが、意識は明確に保っていた。ふと、気付くと、ベッドの脇に亜希子が立っている。賢は黙って亜希子をベッドの中に引き入れて、強く抱きしめた。亜希子は小さい声で言った。

「あなた、抱いてください。わたくしを絶対放さないでください。わたくし、アフリカに行ってしまうようなのです。自分でそう感じるのです」賢は亜希子のパジャマを脱がせ、全裸にした。亜希子の二つの白い乳房が美しかった。ふたりは静かに抱き合った。亜希子の心はなかなか解放されなかった。いつまでも祐子のことが脳裏から離れなかった。賢はその亜希子の心を読み取った。そして、亜希子の全身を愛撫した。30分ほどして、漸く亜希子の身体は完全に開放された。賢をスムーズに受け入れた。亜希子はいつに無く悶えた。終えても暫くの間、亜希子は自分の上の賢の背中を引き付けて離さなかった。賢はいつしか眠りに落ちていたが、ふと気付くと亜希子の姿は無かった。賢はベッドから出てトイレに向かった。二つのシングルベッドには、二人の女性が静かに眠っていた。

翌日の会議は、賢にとって過酷なものだった。ステアリングチームからの執拗な質問攻めに遭った。藤代社長の姿は無かった。

「そんな、理想的なことばかりを追い掛けていては、プロジェクトの目標を達成できないのではないのか？」

「未開の種族の中に、現代文明を凌駕するような内容があるとは思えない。いくら精神的な面を重視するからと言って、国民にわざわざ未開の地の種族の生活を真似させる必要はないだろう」

「大抵の日本人は、そんな考えは拒否すると考えるが、どうだろう。何か凄いインパクトがあれば別だが、今の話では、到底霞ヶ関や議員達を説得できないと思う」

次々に否定的な意見が出された。「ステアリングメンバーはどうして、こうも現実的なんだろう」と賢は思った。しかし、賢には自分の見てきた事実を伝えるより他に術が無かった。あまりの否定的な意見の雨に一瞬会議室の中が水を打ったように静かになった。そのとき、梓が控えの席から大きな声で言った。賢にはその声がこれまで訊いた梓の声の中で一番大きな声に聞こえた。

「発言してもよろしいでしょうか？」

議長が許可を与えた。

「わたくしは、このたび内観リーダーに同行させていただき、ドゴンとホピを視察させていただいた、サブリーダーの田辺と申します。この出張を通じてわたくしの感じたことを話させて頂きたいです。リーダーは報告を省いていますが、わたくしたちは、ドゴンを訪問する前にルワンダを訪問いたしました。そこで目にした光景は、すさまじいジェノサイドの爪跡でした。クツ族とブチ族の間の抗争の結果です。この二つの部族は以前は仲の良い部族でした。それが、フランスやベルギーなどヨーロッパ諸国の介入で、お互いに憎み合う関係になりました。そして、国連の介入をアメリカが否定しました。その結果100万人もの人が殺され、婦女は陵辱を受けたのです。わたくしはアフリカのこの地に世界の縮図を見ました。そして、その近くのマリという国に住むドゴン族に、人の生きるべき道の原型を見ました。リーダーの説明の通りドゴンの人たちは今でも、原始的な社会形態を守って生活しています。ヨーロッパの様々な文明の利器や宗教を是とも非とも判断せずに、マイペースで生きています。大自然との融合です。その対極にあるのがルワンダです。あの国も初めは大自然の中で、自分達の存在を確かめながら生きていました。しかし、外の文明の影響をまともに受けてしまったのです。物質への執着から、他への疑惑、ひいては自己の満足のための他の否定、そして他への嫌悪と止め処なく進み、あの悲しむべきジェノサイドに至ってしまったのです。ドゴンとルワンダの違いは僅かです。大自然への畏敬の念を維持し、他への愛を維持できたか否かだけです。わたくし達は、この事実気付いたのです。MIプロジェクトでは、具体的な手段は異

なるとしても、大自然との融合、そして他への愛の醸成を目指すべきだと理解したのです。皆様方のご意見はその通りだと思いますが、人間の意識の変革に、数千年の年月を費やしている人々も居ることを、もう一度思い起こしていただきたいのです。わたくしからは以上です。発言させていただき、ありがとうございました」

ステアリングチームの一人が言った。

「田辺君、君も内観君と、同じ考えに変わってきたのかね。君の話は、内観君の話と同じように聞こえるがね」

もう一人が言った。

「いや、そうばかりとも限りませんよ。我々は、現在のプロジェクトを進めれば、国民の意識は変わってくるという楽観的な前提でものを考える癖がついてしまっていました。それに対して、田辺君は意識改革の難しさを時間で表現してくれました。実はわたくしもその点が一番引っ掛かっていたところです。皆さんは如何ですか？今のプロジェクトを推進することで、数年の内に国民の大半の意思を変革できるとお思いですか？」

ステアリングメンバーは暫し考え込んでしまった。梓の発言の最後の部分が、会議の出席者に大きなインパクトを与えたようだった。沈黙を破って賢が言った。

「僕は、今回の出張を通して、人間の意識の力を再確認いたしました。聖書にある、「その山動きて海に入るべし、と言えはかくなるだろう」という一節を思い出していただきたいのです。これは単なる教訓では無いのです。先ほども説明いたしましたように、今回の出張で、アメリカ・アリゾナ州のセドナに立ち寄りました。一つにはアメリカン・インディアンのホピ族の生き方を調べることで、もう一つの目的は意識の力を試してみることでした。その意識の力を試すための、パワースポットの訪問で、わたし達は、意識と意思の力がこれまで考えていた以上のものであることを確証いたしました。自分の意識と意志の力で身体の浮揚、遠隔にあるものの拡大視、別空間への移行などができることを経験しました。このプロジェクトの目的である人間の意識の改革は、本来人間の意識に

よって、この世界にあるものを自由に操作できるということを伝えることも、含まれていると思います。つまり、この世界は人間の意識の持ち方で変わるといことです」

ここまで言うと、一部のステアリング・グループのメンバーの中には嘲笑のような笑いを浮かべるものや、隣の者とひそひそ話し始めるものも現れた。その中の一人が言った。

「内観さん、それじゃ、ここで我々にその中の一つを見せてもらえませんか？」

賢は、一瞬返答の言葉に窮したが、少し微笑みを浮かべて言った。

「分かりました。それでは、僕の身体を見ていてください。およそ10分ほど掛かります。それから、僕がトライしている間、あまり大きな声をお出しにならないようお願いいたします。」

賢は瞑目した。会議室は水を打ったように静まり返った。6分ほどすると賢の身体が壇上から次第に浮き上がっていった。出席者は一斉に驚嘆の声を上げた。賢は頭が将に天井に触れる直前で意識を下降に切り替えた。そして、静かに元の位置に戻り瞑目を解いた。全員が賢の次の言葉を待った。

「皆さん、これが意識と意思の力です。本来誰でもできることなのです。古の世界では、このようなことは誰にでもできました」

ステアリング・メンバーの一人が言った。

「内観君、君のパフォーマンスは確かに凄いと思う。しかし、この超能力と、今度のプロジェクトの目的とはどう関係するのか、もう一度説明してもらえないだろうか？」

「はい、この物質重視の世界から、精神重視の世界にハンドルを切るためには、今まで、物質重視の世界で達成しようとしてきたことが、一体何であったのか、そして、その達成を通して人類はどこに到達するのかをはっきり見極める必要があると思います。それからでないと、精神性を重視した世界に変換する真の目的を見失ってしまうと思うのです。そして、精神性を重視する世界が目指すものは何なのか、その結果、人類は一体何を達成できるのかを明らかにする必要もあると思うのです。そ

れが、わたくしが先ほどのデモを行った理由なのです。物質重視の世界では、誰しもがより快適な世界、つまり衣食住足りて生きることには余裕を見出し、そこで自分達の自由な生活を謳歌したいと考えます。また、その世界が永遠に続くことを、科学の力で証明し尽くしたいとの願望があり、そこに向かって必死に努力しているように見えます。しかし、皆さんも既にご存知のように、物質重視の世界の作り出したものは、貧富の差の拡大、自然からの乖離、個々人の孤立など、どう観てもわたくし達が人類として居心地がよいとは思えない世界だと思うのです。個々の独自性、特殊性、自立性を重視しすぎたため、全体との調和、バランス、協調性という人類の生存に不可欠な要素から遠ざかってしまった世界です。マトリクス理論を使って数学的に考えてみても、各要素を完全に独立させて、個々の発展を図り展開すると、エントロピーが拡大し、系全体としての一体性が崩壊してしまうことが、容易に分かります。それが物質偏重の世界の結末のように思います。それでは、精神性重視の世界ではどうなるかということですが、精神性と一口に言っても、非常に範囲が広いと思います。わたくしが精神性の中で何を最も大切に考えているかですが、それは、人間が自然との調和の中で、意識的に生きることだと考えています。そして、個々人が意識的に生きやすい世界を構築することだと思っています。勿論物質も大切ですが、それはあくまで、精神一特に意識一によって、この世界を人類が自然と共存できるような世界に作り変えてゆくことを前提としてのことだと考えます。そのためには、スローガンだけでなく、実際に意識によって物質の状態を制御できるようにする必要があります。ご出席の皆さんは信じられないと思うかもしれませんが、実は人間にはずっと過去から、物質を制御できる力が内包されているのです。DNA情報の中に組み込まれています。そのスイッチが現在の人類ではOFFの状態になっていますから、それをONしてやることで、これができるようになると考えられます。今回のデモでお示したのは、僕の物質を制御できるDNA情報のスイッチを意識によってONの状態にして、実際に自分の重力を制御してみたのです。勿論、物質の制御と謂っても、いろいろな機能があります。それぞれスイッチ

がある場合と、複合の機能として作用する場合とがあります。例えば、物質化という現象も一つのスイッチのONだけでは達成できません。いくつかのスイッチを制御する必要があります。このように、人の意識により、物質世界を創り替えることができるということが理解されれば、精神性を重視した世界への移行に消極的であった人たちに対して、説得力があると考えます。それが理解されると、精神性を重視して、同時に物質的な発展も達成できる社会ができ上がると思います」

一之瀬専務が言った。

「君、君はさっき、手品のようなことをやったが、実際に自分で重力をコントロールしたという証は立てられるのかね？それと、空中浮揚などという手品じみたものでなくて、キリストが行ったとされる、空中からマナを取り出すようなこともできるとでも言うのかね？そういうことができるというのであれば、君の言わんとすることにもある程度信憑性が出てくる。そうでなければ、単なる理想論に過ぎなく思うんだが、どうかね内観君？」

一之瀬の攻撃的な問いかけに、賢は微塵も動じる様子を見せなかった。

「分かりました専務、それでは、空中から物質を取り出してみます。何かトリックがあると疑われないために、専務の前のテーブルの上に、マナ・・・マナがどんなものか良く分かりませんから、パンを一つ出してみます。皆さん、また暫く静粛にしていっていただきたく思います」

一ノ瀬は、賢が本気でそんなことを言うとは思っていなかったようで、目を大きく見開いて賢の方を視た。賢は名目し、瞑想状態に入った。5分経過したが、何も現れない。10分を過ぎた頃、専務が隣の席の笹塚常務の方を見て薄笑いを浮かべたとき、テーブルの上の資料の上にぼんやりと直径10センチほどの扁平なパンの影が現れ、次第にはっきりとした形になっていった。そのプロセスに2分ほど掛かった。賢はゆっくり瞑想を解いて言った。

「一之瀬専務、如何ですか？まだ、僕には十分な制御能力がありませんから、かなり疲れます。ですから、一旦説明を終了させていただきます。ありがとうございました」

暫くの間、会議室内は静まり返ったままだった。やがて、あちらこちらで囁き声が聞こえてきた。賢は演壇を降りて、控えの自席に戻った。梓が微笑んで迎えてくれた。楠木は目を丸くして賢を見つめた。言葉が出ないようであった。この日の会議はその後、プロジェクトの進捗状況の説明などがあり、大きな問題も無く終了した。梓の機転と賢のデモンストレーションで、プロジェクトのフォロー会議は静かな興奮の内に終了した。

賢のデモンストレーションがあってから、その日のうちに社内に流言蜚語が飛び交い始めた。賢が手品師だというもの、ペテン師だというもの、仏陀やキリストの生まれ変わりだというもの、異星人じゃないかというものまで現れた。賢が梓と共に社内食堂で昼食を摂っているときは、あらゆる方角からふたりに視線が注がれていた。賢はそれをあまり意識していなかったが、梓は小気味よさを覚えていた。自分自身も体験した空中浮揚を、賢が会社のトップの前で披露したことにある種の満足感を覚えていた。

その日の業務は、出張報告と、承認待ちの状態でストップしていたプロセスを軌道に戻すことだった。大抵の事項は楠木が代行で処理してあったが、人事に関する事項と、スケジュールに関する件はどうしても賢の決済が必要だった。人事で最も重要と考えられたものが、副リーダーを置くというものだった。それは藤代社長の意向として、人事部から上程されていた。その理由は、賢が不在がちなので、業務の進捗をスムーズに行わせるためというものだった。賢は迷い無く稟議書の承認を行い、社長の最終決裁を伺うプロセスに乗せた。もう一つの大きな懸案事項は納期の1年前寄せを検討するというものだった。現時点までは10年計画で進んできたが、人々の意識の不安定さが、犯罪や自殺の増加、失業者と非就労者の増加、出生率の低下などの統計的數字に顕著に現れてきたとする国民実態調査委員会の文部科学省への答申に示されたこともあり、総務省からMIプロジェクトに対し、達成目標年度を2年前寄せできるかどうかという打診があった。それに対して、「東領製作所として、1年短縮までは努力する」と回答するという案が浮上しており、そ

の案を正式な回答書として策定した文書の決済がプロジェクトリーダーである賢に委ねられていた。賢は直感的に不可能であることを覚り、その案を却下することにした。霞ヶ関の顔色を伺ってきた総務部が、1週間を掛けて策定した具体的な施策を含む納期短縮案であったが、総務部長からのヒアリングもせずに行った賢の裁定は、総務部門の反発と、企画部門の不快感を招き寄せた。

その日は、終業すると直ぐ梓と連れ立って、近くのコーヒーハウスに立ち寄った。出張報告書の作成に附いて相談することにした。不用意に全てを報告することは危険だった。梓は、当初の目的だった、ドゴンとホピに附いての報告だけに絞り、ルワンダとセドナについては少し触れるだけにしたらどうかと言った。賢は、それに加えて、ケルトを省略した理由を明確に述べておくことと、2部族の長老の話の内容から、プロジェクトにどういう方向性を追加するべきかという提言を考察の中に含めた方が良いと言った。梓はこの日はそこから真っ直ぐ自分のアパートに帰って行った。賢はバレエスクールに立ち寄ることにした。愛子のロシア行きについて、雲井と話し合う約束をしていた。

「お疲れのところ、お越しいただいて恐縮いたします。それでは、愛子さんを留学させることに、同意していただけるのですね？」

「はい、でも愛子の学力のことが気に掛かるのですが」

「それは大丈夫ですわ。これまでに留学した子女は、大抵親日的な家にホームステイして日本人学校に通っていますから。それに1年間でしたら、日本の学校を休学するという方法がありますし、もしそれ以上の教育をお受けになる場合は、帰国時に日本の学校に編入の申請をされたらよろしいと思います。半年お待ちになって、愛子さんが中学校を卒業してから留学されるのであれば、ロシアの高校に留学されたらよろしいと思います。当初はアドミニストレーションの期間が必要になりますが・・・」

賢は、愛子が放り出される心配だけはなさそうだと感じ安心した。中学を卒業してからロシアに留学させることを正式に頼んだ。日本人学校の高校部門に通いながら、バレエの教室に通うという道を選択させた。雲

井との話し合いを終えて、練習室を覗いてみると、愛子が他の娘達と一緒にレッスンしている姿が目飛び込んできた。愛子の動きは、以前訪れたときにくらべ、素人目にも数段上達しているのが分かる。雲井が留学を薦める理由も頷けた。愛子も賢に気が附いているようだった。賢は控え室に戻りレッスンを終了するのを待った。

愛子は賢と手を組んで歩いた。

「賢パパ、中学を卒業したら、お別れね。わたし寂しくなんかない」それは、感情を押し隠すために自分の気持ちを裏返して表現した言葉だと賢には直ぐに分かった。

「愛子、これは、愛子の選択した道だからね。道の向こうに見えてくるものは、自分の意識が呼び寄せたものだからね」

「賢パパ、分かっている。わたし、辛くても、真っ直ぐ前を見て進む」マンションに着くと、部屋には愛子の友達の青年水口が来ていた。亜希子が夕食の支度をしていたので、一人でテレビのニュースを見て愛子を待っていた。愛子の姿を観ると直ぐにテレビを切った。愛子が言った。

「おかえり。待たせてもらったよ」

「水口君、わたし、ロシアに留学することになったのよ。凄いでしょ」

「えっ？それじゃ、同じ高校に行こうと言っていたのは嘘だったんだ」

「ごめんなさい、ついこの間まではそのつもりだった。でも、今日話が決まったのよ。水口君、半年したらお別れね。いいじゃない、高校に行けば、直ぐに新しい友達が出来よ」

「よし、僕もロシアに留学する。それなら、君と会えるし……」

亜希子が声を掛けた。

「水口君、夕食、ご一緒にいかがかしら？」

「いいえ、きょうは、僕は帰ります」

水口が帰ると、亜希子は食卓を用意した。部屋の中はきれいに片付いて、床も磨きを掛けたように光っていた。

「亜希子、大変だったね。旅行で疲れていただろうに」

「いいえあなた、あなたのお仕事に比べたら、わたくしはたいしたことばしておりませんもの。それに、午前中は愛子さんがお手伝いしてくだ

さったからとても助かりましたわ」

賢は疲れを感じていたが、愛子と共に麻子の位牌に祈りを捧げると、深呼吸を一つしてから食卓の席に着いた。

「あなた、今日は大変だったでしょう。報告会は問題ありませんでしたか？」

賢は、初め今回の調査の内容について、悲観的な意見を浴びたが、梓の機転でその場を切り抜けたこと、その後、空中浮揚のパフォーマンスを見せたことなどを説明した。亜希子は賢の次元を超えた能力が、社内の誤解を招く恐れがあると感じた。食事が済むと、賢は出張旅行のまとめをすることにした。失踪調査ノートを取り出し、セドナで可能になった空中浮揚や空間移動、透視能力と失踪との関連を探ってみることにした。1番目のケースである浄蓮の滝のページを開き、内容を一通り確認してみた。賢は由美の持つ能力が、亜希子の持つテレポテーションの能力を自分で制御できるようにした力ではないかと考えた。しかし、由美は過去、現在、未来をスルーした意識の制御と、自分の肉体の操作ができる。亜希子はこれまで、それが不可能だった。ただ、自分の強く意識したところへの瞬間移動と、自分が望む意識ある存在をビジュアル化ができる。今回のセドナの体験を通して、どれだけ自分自身の制御が可能になったかを知る必要があると思った。愛子は賢の影響とはいえ、空中浮揚を果たしたし、体のスピン運動を体験した。そして、自分は意識のコントロールと、意識により顕現している要素の制御ができるようになったという自覚がある。賢は二人の女性に話し掛けた。

「なあ、亜希子と愛子、君たちも自分の変化を感じていると思うけど、セドナの体験から、自分たちの能力がどのように変化したか、これから確かめてみないか？」

愛子がうれしそうに賛同した。亜希子も是非確かめてみたいと思った。特に今まで抑えることができなかった自分の不用意なテレポテーションをどこまで制御できるようになったのかを知りたかった。賢は先ず、愛子の変化を調べようと言った。愛子には透視や、拡大視、遠隔視の能力が開花したということではなかった。賢は愛子が自動的に回転してしま

った時のことを思い返して、運動能力を調べてみることにした。愛子にバレエの練習着に着替えさせ、ダンスを躍らせてみた。愛子は、回転すると、重力の影響を受けにくくなることが分かった。回転しながら、床を蹴る動作をさせてみた。案の定、愛子は天井に手がつくほどまで飛び上がることができた。賢は愛子に、瞑目して意識で自分を回転させ、天井に向けてジャンプさせてみた。果たして、愛子は瞑目したまま、体が空中に舞い上がった。瞑目を解かせると愛子が歓声を上げた。

「賢パパ、わたし、空中浮揚できた。すごーい。それでね、回転する速度を変えるように意識すれば、浮揚する高さも変わるみたい。これって凄いことじゃない？」

「うん。愛子、すごい能力が身についたじゃないか。大事なことは、自分でそれを制御できることだ。今は回転することで周囲の空間と自分が融合している状態だが、一步進んで意識的に空間全体を自分の意識で充たすことができるようになれば、空中浮揚する為に回転の力を使う必要もなくなるはずだよ。それにもし、バレエで回転したときに不用意に空中に浮いてしまっただろう」

「意識を広げることでしょう？それはできるみたい。回転しても自分が浮こうとしないと、浮かないもの。ほらね」

そう言うと、愛子はもう一度くるくると回転して見せたが、体が浮き上がることはなかった。賢が拍手をしてよろこんだ。次に亜希子の能力を調べることにした。亜希子の能力は飛躍的に向上していた。先ずテレポテーションの能力から調べてみた。一旦寝室に入り、ドアを閉め、そこから賢たちの居る今のソファの近くにテレポテーションできるかどうかを調べてみた。それは直ぐにできた。ソファの近くに現れたとき亜希子は言った。

「今までとは少し違うような気がします。何と言ったらいいのでしょうか。移動しているのが分るような感じなのです。それで、現れる場所も意識的に選べるようです」

亜希子は浴室の中と、部屋の外への移動も試してみた。すべて、自分の意図した場所に現れることができるようになっていた。賢と愛子は拍手

をして祝福した。賢が言った。

「亜希子、場所から場所に単純なテレポテーションは問題ないだろうが、亜希子の場合は、次元を超えたときは深い層に入り込む危険性があるから、まだ暫くは慎重にしたほうがいいよ」

「はい、わたくしはこの能力を、本当に必要なとき意外は使うつもりはありません」

「うん、そのほうがいいと思うよ。テレポテーション自体に危険性があることに変わりはないからな」

次に亜希子の透視能力について調べてみた。原の状況を透視してみることにした。原がこのマンションに向かって来る途中であることが直ぐに分った。亜希子は瞑目しなくても見えると言いだした。それはすごいことだと賢は思った。意識を向けたものの状態が眉間にヴィジョン化すると言った。亜希子はいろいろ試してみた。しかし、やはり意識を働かせていないものについては透視できないということがわかった。亜希子は不思議なことに気づいた。人間については意識を働かせているかどうかは鍵なのだが、動物、植物や鉱物はどんなものも直接透視することができるのだ。亜希子は青山の家の自分の部屋にある掛け時計を透視してみた。針の示す位置まで明確に読み取ることができた。亜希子はそのことについて賢に質問した。

「亜希子、君の透視は、君の意識が反映された対象に対して有効だということじゃないかな。だから、一度も見たことのないものは透視できないと思うよ。だけど、人間は別のようだ。人間だけは、意識を持っているし、意識の最も底ではすべての人間が共通だから、どの人間に対しても、相手が意識的でありさえすれば、透視が可能なのだと思うよ」

「あなた、それで納得できました。先ほどから、あのレストランの中の様子を見てみようと思って、意識を集中してみたのですが、どうしても見えなかったのです。今度は少し、方法を変えてみます。あのレストランでいつも使っていたトレーととても愛着があったのですが、それに意識を向けてみますわ」

亜希子はしばらくじっと窓を見つめていたが、振り返って言った。

「あなた、見えました。トレイとその周りの状態がよく分りました。トレイはトレイ置き場にあるようでした。周りにあまり人影はないようです。今日はあのレストラン、あまり混んでいないようです。でも、店の中全体は見えませんでした」

愛子は笑った。どうしてトレイが好きなのかと亜希子に聞いたりした。亜希子もまじめに答えている。そのときチャイムが鳴った。原がやって来た。

「こんばんは、皆さんお揃いで。今日は、賢さんに最近の売り上げ状況を説明しておこうと思ひまして」

「原さん、食事はされましたか？」

「ええ、今日はさっきまで常務が来ていましたので、一緒に済ませました。それで、来るのが少し遅くなってしまっ」

「留守している間、ご苦労様でした。どんな具合ですか？」

「はい、すごい勢いです。指数的とまではいきませんが、日に日に販売台数が伸びています。もう、工場が手狭になってきて、今度は倉庫を確保して、造り込まないと回らなくなりそうです。あの工場には在庫用の倉庫が十分に確保できていないんです。前の会社が看板方式とかで、倉庫をあまり持たない経営をしてきましたから」

「現在受注残はどれくらいあるのですか？」

「工場での生産が軌道に乗ってきていますので、一時より少し減って2500台ほどになりました。でもさっきも言ったように受注量はうなぎのぼりです」

「一度組織の拡張をしないと、ロジスティックスに問題が生じてしまうな」

「はい、そう思います。現在は運送業者に頼っていますが、いずれ自社でそれをコントロールしないと、お客様に迷惑をおかけすることになりかねません。それと、開発設計部門や、法務、特許部門も新設しないと、製造と品証とサービスだけでは、CS(カスタマー・サービス)がうまくいかないかもしれません」

「だけど、組織はできるだけシンプルにしたいな。総務、経理、開発、

生産、製造、品証、営業、CSでいいだろう。法務は総務の中に、調達、配送は生産の中に、在庫は製造、検収は品証、納入はCSでやることにしたらどうだろうか？」

「ええ、それでいいと思います。将来のことを考えて、今のうちに月産100万台まで対応できる総合システムを導入しておいたほうがいいと思います。リレーショナルなデータベースを用いた全製品のプロセスをリアルタイムで把握できるシステムで、最大10万台まで端末を増やせるシステムですが、最初は10台の端末からスタートしたいと思っています。CPUはニューロ方式のもので、カスケード方式の多重化ができるものになりました。ストレージの拡張時はあらゆるネットワークに対応する可能性を有したバスコンタクトのフロントエンド・インターフェイスを採用しています。常に端末100万台を意識して拡張するシステムです。システムが生き物のように大きく成長できるシステムです。生産規模が拡大したときに前のシステムを廃棄して、新しいシステムを導入するような愚を行わないようにしておきます」

「原さん、いつの間に生産システムまで……」

「こんなの、たいしたことないですよ。たかだかコンピュータの演算じゃないですか。人間の意識と同じで、最初にどこまで意識しているかで、そのシステムの寿命が決まるんです。そうでしょう。総理大臣になりたいと思えば総理大臣になれる。人工衛星のパイロットになろうと思えばそうなる。システムも同じと思いませんか？はじめに小さい規模を想定するから、途中で死んでしまうと思うんです。月産100万台も、僕にすれば、小さ過ぎるような気がします。この自然界や宇宙から見たら、ゴミみたいな数ですから」

「原さんには、かなわないな。で、そのシステムの価格は高そうだね」

「価格は重要じゃないと思いませんか？ほとんど人件費ですから。このシステムはリースできるんです。当初は月額100万円、月産100万台の時点では、月額10億円です。社内には一切コンピュータを置けませんよ。端末だけです。まあ、PCくらいはスタンドアロンで使ってもいいでしょうけど、でも全部システムの中にありますから、それも不要

です」

「原さん、もしかして、このシステムに入れ込んでいませんか？」

「いいえ、これは簡単ですから・・・それより、次の製品に意識が向いていて、今その構想を練っているところです。所長から連絡があって、保管しておいた資料をすべて送ってもらえたんです。あのころ考えていた、新しいシステムのことも、今ありありと甦ってきています」

「そうでしたか。ところで、所長はお元気ですか？」

「はい、また、元の鞆におさまったようで、相変わらずあのマンションの部屋で、一人、番をしているようです。いろいろ事件があったので、会員が増えて、現在、正会員が50人を超したようです。賛助会員はもう400人以上だと言っていました。そうそう、あの橘さん、高校も辞め、正会員も辞めて、海外に移住してしまったようです。何かあったのでしょうかね」

「えっ？そうですか。祐子の失踪を自分の責任と思っているのでしょうか。心の純粋な方でしたから。それで、どこの国に移住したのですか？」

「やはり、何かあったんですね。所長はインドとか言っていました」

「原さん、今日は愛子に面白いものを見せてもらいましょう」

「えっ？愛子さんですか？な、何ですか？」

「まあ、見てのお楽しみ」

男達の話をもじって聞いていた二人の女性は顔を見合わせた。愛子が原をからかうように言った。

「原さんにも見せちゃうの？」

「うん、是非見てもらわなくちゃ」

愛子はテレビの横にあるCDプレーヤーの電気を入れ、プレイボタンを押した。白鳥の湖の第3幕の演奏が流れだした。

「愛子、僕たちには音楽なしだったのに、原さんには音楽付きだな」

愛子は知らん振りして踊り始めた。やがて回転する場面になった。愛子の体は次第に浮き上がり、天井に向けてゆっくり上がってゆき、頭が天井に着きそうになる一歩手前で静止して、そこで手を上下してゆっくり回転している。原は、口をぽかんと開けて見つめている。やがて愛子は

ゆっくり降りてきて、床の上で回転をした。原は思わず拍手をした。賢と亜希子も少し遅れて拍手した。愛子は踊りながらCDプレーヤーのところに行き、ストップボタンを押した。

「愛子さん、いつ空中浮揚できるようになったんですか？」

「セドナよ。賢パパと一緒に浮き上がったの、それからだと思う」

「どうやったらできるのですか？」

「わかんない。賢パパに聞いて」

「原さん、意識での重力コントロールですよ。確信に基づいたものとも言ったらいいかな。空間を自分の意識で充たすような感じです」

「つまりは、重力は意識の作用で働き方を制御することができるということですね」

「そうです。原さんの得意な領域じゃないですか？」

「重力の部分は、少しややこしいんです。意識と関係があるところまでは掴んでいるのですが、関係式が導き出せないのです。でも、今日の愛子さんのダンスを見ていて、数式化ができるということが分かりました。だけど、まさか愛子さんにこんなことができるなんて……」

「原さん、わたしたちは、失踪経験があるのよ。あちらの世界に近い位置に居るから、ほかの人のできないこともできる可能性が高いのよ。ねえ、賢パパ」

「うん、そうだな。原さん、今日、会社の報告会で、ステアリング・メンバーの前で空中浮揚を披露したんです。みんな、ぽかんとしていました。その後、社では否定的なうわさが流れていたようです。あの人たちにとっては、現実的じゃないんです。僕らが失踪したこともね」

「でも、本当にいいものを見せていただきました。これで、確信が持てました。必ず重力と意識の関係式を導いて見せます。期待しててください」

原は上機嫌だった。

翌日、賢と梓は昨日不在だった藤代肇への報告のため、社長室を訪れた。藤代は二人の姿を見ると、親しげに右手を挙げて部屋に入るように促した。

「内観君、田辺君ご苦労様。今回の出張では面白いことを吸収してきたようだね。問題は、それを今度のシステムにどう組み込むかだな」

「はい、社長。意識を純粹にして自然との一体化を図るように指導する仕組みを組み込むのにはかなり工夫が要ると思います。むしろ知らない内にそのような意識になるように導く環境を作る必要があると思います」

「まあ、具体的なことは後でゆっくり考えてもらおうとして、君たちに頼みがあるんだ。帰国したばかりで済まないが、もう一度海外に調査に行ってもらいたいんだ。今度は、他の国が、意識改革に取り組んでいるところを訪問して、その成果や進捗の度合いを調べて来てほしいんだ。なかなか難しい仕事だが、君たちなら必ずできると思っている。重要な先進国と中国それにインドを廻ってもらいたいんだ」

「社長、われわれのシステムが他国に比して、優位に立てるように工夫しなさいということですか」

「内観くん、さすがに察しがいいね。申し訳ないけど、今回行ったアメリカのフェニックスにも、もう一度行ってほしい。君は詳しいと思うが、あの近くにサンシティという町があるだろう、あそこは老人たちの天国だというじゃないか、本当にそんな町があるのか老人たちの穏やかな生き様を調べてほしい。それと、理想的な生き方をしていたというアメリカン・インディアン現在の葛藤についても調べてほしい。そして、これが最も大切なことだが、フェニックスにある意識改革センターの進捗状況を調べてほしい。カナダは、楠木君が調べてあるからいいとして、あと、オーストラリアのアボリジニの人々の現在の生き方、スウェーデンの福祉国家としての国のあり方、そこに生きる国民の実際の感想。ブータンという国のあり方と人々の生き方、そしてインド、一度行ったところで済まないけど、ここは国民の階級制度に対する意識と、もしできたら、聖者といわれる人に会って、理想的な生き方について意見を聞いてほしいんだ。どうして、あれほどの人々が悟りを目指して修行しているのに、未だに貧富の差がはげしく、制度も整っていないのか。そして、瞑想センターでは人々の意識の変容が、実際にどの程度達成されるもの

か調べてほしい。中国では長い歴史によって培われてきた、気功や錬功、太極拳などの効果を調べてほしい。これだけのことを調べるのだから、少なくとも1ヶ月はかかるだろう。それで、その間、楠木君だけでは荷が重過ぎるので、君の直接のサポートをする副リーダーを選ぼうと思ったんだがどう思うかね。もう、稟議書は見てくれたかね」

「社長、副リーダーの件は既に承認して回付いたしました。それと、今おっしゃった調査は、すぐに実施しないとまずいのでしょうか？」

「うん、政府が今度のプロジェクトの成果予測を、他国の状況と比較して行うように言ってきている。政府も財政難の折にこれだけの資金を投入する理由を国民に説明できるだけの試料を作り上げたいようなんだ。次の通常国会で、教育改革法案として提出するつもりらしい。通常国会は10月だから、それまでに説得力のある資料を作成するつもりだよ。われわれの所には、他国と比較したときの優位性を前面に出すように通達がきている。君の書類受けに溜まっている文書の中に、その通達文書もあるはずだ、後で確認してくれ」

「分かりました。できるだけ早急に出張計画を立案いたします」

ふたりは社長室を出ると、一旦プロジェクトルームに戻った。珍しく楠木が一人で書類を作成していた。ふたりが入ってゆくと、はっきり作り笑いと分かる会釈をふたりに投げ掛けて言った。

「社長は、何とおっしゃっていましたか？リーダーが空中浮揚したことに附いて何かおっしゃっていませんでしたか？」

「空中浮揚に附いては何もおっしゃっていなかったよ。だけど、海外諸国の状況を調査するようにという指示をいただいた。それも直ぐに出発するようにと」

「そうですか。いつ、出発されるのですか？まだ、詳細仕様の作成段階ですから、リーダーからはご指示をいただくだけで、我々は動けますけど、霞ヶ関や政府への対応、それから、5社会議での調整、他社の牽制など、リーダーが居ないと苦しい場面が結構ありますから・・・」

「今度は1ヶ月近く不在にすることになりそうだから、社長が、副リーダーを連れて来るっておっしゃっていたよ」

「そうですか。田辺さんも同行されるのでしょうかね」

「ええ、すみません、楠木さんにばかり負担が掛かってしまって」

「それは、大丈夫です。でも副リーダーになる方との調整をしっかりとおかないと、リーダーの考えがプロジェクトメンバーにうまく伝わらなくなってしまいますよ」

「うん、今日の午後、その人に会う事になっているよ。楠木さんも、田辺さんも立ち会ってください。ぼくはこれから霞ヶ関に行って、諸外国の事情をどの程度調べたいのか確認して来るよ。田辺さんも一緒に来てくれるか？」

「勿論、同行させていただきます」

政務次官の意向は、藤代が説明したものとはほぼ同様であったが、一つだけ、賢に違和感を覚えさせた内容があった。それは、インドや中国などはまだ精神性の改善活動がうまく進んでいないということを明確に示せる証拠を見つけてきて欲しいというものだった。それと、アメリカについては、その取り組みが正しい方向を向いているということを示せる内容が欲しいと言った。日米同盟は理解できるが、政府の意図している精神性の改善は、あくまで諸外国の動きを睨んでの取り組みでなければならないというスタンスだったのだ。分かってはいたが、直接説明を受けると、政務次官の周りから倦怠感の風が吹いて来るような感覚を覚えた。一応了解したということでその場を辞して外に出た。ふたりは途中で中華料理店に入った。二人掛けの席に案内された。

「リーダー、わたくしも次第に、この社会に生きる人々が、自分達の作った仕組の中で、もがいているように見えてきました。これはきっとリーダーの影響ですね」

「政務次官のことか？」

「それもあります、そればかりじゃありません。会社の中でも、電車の中でも、道を歩いていても、そして、このレストランの中でも」

「梓、神経質になったらノイローゼになってしまうから、心を落ち着けて、通常は思考を止めて生きたほうが良いと思うよ」

「はい、リーダー。ところで何を食べましょうか？」

「硬焼きそばにするよ。君は？」

「わたくしは、エビソバにします」

食事は直ぐに運ばれて来た。二人は食事をしながら、時々、顔を見合わせて、微笑んだ。賢の焼きそばはそれ程熱くはなかったが、梓のエビソバは上に掛けてあるとろみが熱かった。梓は、麵をつまみでは息を吹きかけながら、口に持ってゆく。そして、それを噛んで飲み込むとき、少し微笑んだ。賢は梓が微笑むときに頬に出来るえくぼを可愛いと思った。ふと、祐子を思い出した。もう、ずっと祐子の笑顔を見ていない。あの太陽の輝きのような笑顔をもう一度見たいと思った。

「梓、いつの間にかまた、リーダーになっているな。賢と呼んでよ」

「はい、賢さん……やはり、照れます」

「今度の出張でも、君は本当の女房のようだった。いつも僕の傍に居て、僕を支えてくれて、本当に感謝しているよ」

「リー、……いえ、け、賢さん、わたくしは当然のことをしているだけです。業務命令ですから。」

「でも、君が居てくれたおかげで、僕はどれほど助かったか知れない。業務以上のことをしてくれているじゃないか」

「……では、何かお礼のプレゼントをしてください……というのは冗談ですよ」

「梓、まじめな話、何かお礼をするよ。何が欲しい？」

「賢さん、わたくしはもう、精神性が大切なことが分かってきましたから、物は欲しくありません……あなたの心があれば……」

梓は最後の部分を小さい声で言った。賢は軽く頷いた。

午後の会合は社内の応接室で行われた。副リーダー候補の男は約束の時間の30分以上前から、早々と応接室に案内されて賢たちの来るのを待っていた。賢が、楠木、田辺と一緒に応接室に入ると、副リーダー候補の男は直ぐに立ち上がって、賢に向かって頭を下げた。

「このたび、藤代社長から委嘱を受け、内観さんの支援をさせていただくことになりました、九州支社の営業部長を拝命しております久保蔵と申します。よろしく願いたします」

「わたくしが内観です。こちらがサブリーダーの楠木さんと田辺さんです。よろしくおねがいたします。まあ、お掛けになってください」
全員が席に着くと、久保蔵が話し始めた。

「このプロジェクトが国家プロジェクトとして、日本、いや世界の将来の存続を決定付けるほどの必要な意味を持っていることを藤代社長から伺いました。そして、皆さんの担当されているのが、インフラ部分で、MIプロジェクトの中で、最も重要な部分だとも伺いました。藤代社長は自分に、副リーダーになるようにとおっしゃいましたが、果たして職務を適切に遂行できるかどうか不安に思っています」

「現在、プロジェクトは企画段階の中でも詳細仕様を策定する段階に入っていて、力仕事が必要になってきています。この詳細仕様策定に掛かっている人数はおよそ50人です。全員が停滞することなく、業務を遂行できるように推進を図っていただきたいと思います。ところで、まだ自己紹介が終わっていませんので、先ず、ご自身のことを紹介していただけますか？」

「はい、分かりました。わたくしは44歳になります。昨年後厄も終わりました。もう、健康面で危ないことは無いと思います。もともと、鹿児島県の石灰石の鉱山で砕石業を行っていた工夫ですから、体力には自信があります。鉱山が閉山になって、それから5年ほど金属関連の営業をやっています、東領製作所の九州支社とも取引があり、何度となく伺わせていただいている内に、九州支社に雇っていただくことになりました。そして、このたび社長から支社長を通して、お話いただいた次第です」

「そうでしたか。それでは支社長の鷺沼さんとかその部下の香川さんをご存知ですか？」

「勿論です。わたくしは鷺沼さんに雇っていただいたのですから。あの、まじめな香川君のことも良く存じています」

賢は、九州支社との縁の深さをしみじみ感じた。最も気になったのは祐子のことだった。そのことを思い切って訊いてみた。

「久保蔵さん、つかぬ事をお聞きいたしますが、半年前に起きた、社長

令嬢祐子さんの失踪事件のことはご存知ですか？」

「知るも何も、あのやくざ者の小山田社長を追うように藤代社長からじきじきにご指示をいただいております。あいつも同じ山を追われた者なのです。ご存知のように、結果は、失敗に終わりましたが……」

「そうでしたか。それで、久保蔵さんは、このプロジェクトが、今までの常識的な考え方ではうまく推進できないことをご存知ですか？」

「ええ、分かっているつもりです。もともと、わたくし自身が世間一般の常識から外れた考え方で生きて来た人間ですから、MIプロジェクトのような後付のプロフィット捻出というようなことを、むしろ面白いとさえ感じています」

「プロフィットですか。藤代社長からそう言われたのですか？」

「ええ、わたくしは営業をやってきましたから、粗利をどれくらい稼げるかが常に頭の中にあります。社長は、わたくしに、「お前はこの利益が出しにくいプロジェクトから、どれだけ利益を上げられるか考えろ」とおっしゃいました。「その上で、プロジェクトの仕様をまとめるように努めろ」とおっしゃっていました。そうそう、それから、「内観君は、純粋に精神改革のことだけを考えているから、お前が損益を見た運営のことを考えろ」と」

「とすると、久保蔵さんは、日本人の精神性を改革するという試みについては、あまりご存じないのですか？」

「わたくしも、現在の日本人の生き方は問題だと考えています。子供の頃から、随分虐げられた人生を生きてきましたから、精神の安定性が如何に大切か、嫌というほど分かっているつもりです」

「そうですか、それは大変失礼しました。それでは簡単に僕達の自己紹介をして、それから、現在までのプロジェクトの進捗と、課題などを説明いたします」

夕刻まで、話し合いは続いた。梓は、時折目を瞑ったまま動かなくなっていたが、10秒ほどすると、はっとしたように目を開け、息を吸い込んでいた。賢は「疲れている」と思った。賢は久保蔵が、自分に対して他意なく、腹蔵のない人間だということを見抜いた。

「大体理解いただけたようですね。では、今日はこれまでにしましょう。夕食でもご一緒いたしましょうか？」

「すみません、今日はこれから、九州支社に戻らなければならないのです」

「そうでしたか。それは残念です。またにしましょう。ところで、香川さんはどうされていますか？」

「あれ、ご存じなかったんですね。香川君は自己申告が受け入れられて、本社の海外営業に配転になりました。直ぐにアフリカ担当になって、現地駐在に出たと聞いています。祐子お嬢様が捨て身で女性たちを救った話がテレビのドキュメンタリー番組で放送されてから直ぐのことです。あのテレビを見て影響を受けたものが大勢いますが、彼もその内の一人だったようです」

打ち合わせを終えると、賢と梓は事務所に戻った。梓が昨夜まとめておいた出張報告書に賢が修正を加えた後、梓がステアリングチームに対しメールでの配布を行ってから会社を出た。梓が言った。

「香川さんは、祐子さんの拉致を自分の責任だと考えていましたから、そういう行動に出たのでしょうかね。彼はどうするつもりなのでしょうか？」

「多分祐子を救い出そうと考えているのだろうな。だけど本当のところは分からない」

食事が済むと、二人は地下鉄の駅に向かった。大勢の人たちがひしめき合うように歩いている。賢はふと、背後からの強い視線を感じた。

「梓、追跡（つけ）られているようだ。撒くから、僕に近づいて附いて来て」

梓は賢に身を寄せた。賢は右側にある外資系商社のビルに入った。広いエントランスだ。賢は梓を促して、エレベータのある方向に向かった。エレベータは6機あり、いずれも24階まで行けるようだった。賢は直ぐにボタンを押した。まだ鋭い視線に追われているのを感じていた。それは27、8歳の若いビジネスマンのようだった。身長170センチ程の、見たことのない男だった。茶色のビジネスバッグを手にしている。

男がエントランスを入って来ると同時に、エレベータの扉が開いた。賢と梓は直ぐに乗り込み、24階のボタンを押し、扉を閉めた。そこで、男の視線からは逃れられた。賢は瞑目した。男の姿を捉えることができた。エレベータのボタンを押している。しかし、エレベータの扉が開いても乗ろうとしなかった。扉が閉まった。男は辺りを見回してから、踵を返すとエントランスから出て行った。

「どうしたのですか？」

「この階の屋上にレストランがあるようだから、そこで食事をして、少し寛ごう。梓も大分疲れているようだしな」

「わたくしは大丈夫です。でも、一体誰が追跡(つけ)ていたのかしら？」

「分からない。梓、外に出るときは気を付けろよ」

「わたくしは大丈夫です。それより、賢さんこそ、気を付けてください」

賢は、亜希子に連絡をして、食事を済ませて帰ることを伝えた。亜希子は少し元気の無い声で「分かりました」と応えた。既に食事の支度が出来ているはずだったが、そんなことは一言も言わなかった。二人はレストランに入ると、イタリア料理のカツレツとスパゲッティを注文した。展望レストランでの夜景を眺めながらの食事は、眠気も手伝って、梓を夢心地にした。食事が済むと、ふたりはコーヒーを飲みながら、次の出張計画に附いて相談し、およそ1時間を過ごした。3日後に出発することにした。政務次官から、できるだけ早く出発するように迫られたため、どうしても出発を3日以上先に持ってゆくことはできなかった。翌日から、梓が各国の訪問先とアポイントメントをとることになった。フェニックスから廻ることにした。航空券は全てオープン、ビジネスクラスでの出張に決めた。同行させる者は藤代の意向に沿って、亜希子と、梓と楠木の直属の部下の男性1名ずつの3人にすることにした。部下の2人は、何時でも海外出張の準備が出来ている者たちで、バイタリティのある若手だった。賢は今度の出張で、祐子への接近が可能かどうかを模索していた。調査の目的地にアフリカは含まれていない。経由地としてアフリカを選ぶ方法を考えることにした。梓が言った。

「賢さん、アフリカに寄る理由として、正式に香川さんを訪問するとい

うのはどうでしょうか？彼は MI プロジェクトのメンバーだった人ですから」

「そうだね、何とか香川さんに連絡をとってみてくれないか？もし、状況的に可能だったら、是非寄らせてもらおう」

「もし彼が了承したら、本当に寄るつもりですか？」

「やはり、計画段階での虚偽はまずいと思う。そう思わないか？」

「はい、そうですね。実際に会うことができれば、それに越したことはありませんから」

「梓、明日、香川さんの連絡先を調べてくれないか？出掛ける前に話してみたいんだ」

「分かりました。海外営業部に聞いてみます。賢さん、今日はもうマンションに戻られますか？」

「うん、そのつもりだけど、何か用があるのか？」

「はい、わたくしの両親のことで、少しご相談したいことがありまして、もしお時間をいただけましたら、途中、わたくしのアパートに寄って行っていただきたいのですが・・・」

「それは、かまわないよ。何か問題でもあるのか？」

「ええ・・・詳しくは、アパートでお話します。ご覧になっていただきたい写真なんかがありますので・・・」

梓のアパートの部屋は書類が散らかったままだった。賢は梓がレポート作成に奮闘していたことを知った。床に散乱した書類の中に小包を解いた包装紙があるのに気付いた。

「梓、あまり寝ていないんじゃないか？レポート作成も大変だっただろう」

「はい、本当は昨日徹夜してしまいました。部屋が片付いてなくて、申し訳ありません。」

そう言いながら、梓は散らかっている書類を手際よく片付け始めた。落ちた肩の線から疲れている様子が分かる。賢も片づけを手伝った。梓はまとめた書類をテーブルに戻そうとして、ソファの端に躓いて、倒れた。その拍子に手にしていた書類が、ばらばらに散ってしまった。梓は

その場にしゃがみこんだまま、下を向いて苦しそうに、はあ、はあ、はあ、と3度呼吸をした。賢は直ぐに梓の傍に駆け寄った。

「梓、大丈夫か？」

「……………リーダー、大丈夫です。申し訳ありません」

「疲れているんだ。少し休めよ。僕は今日は帰るから、そのまま寝てしまった方がいいだろう」

「いいえ、少し休めば大丈夫です。折角来ていただいたのですから、是非、相談に乗っていただきたいのです」

「分かった。じゃ、兎に角、一旦ベッドに横になれよ。そして、30分でいいから寝て、それからにしよう」

梓は素直に従った。着の身着のままの姿で、ベッドに身体を投げ出した。賢はソファで暫く瞑目し、この日を逆に迎える省察を行った。1時間してから、賢は梓に声を掛けた。

「梓、起きられるか？」

梓は、目を擦りながら起き上がった。熟睡していなかったことは明白だ。賢は、それでも、梓が休息できたはずだと思った。

「賢さん、もう10時を回ってしまいました。わがまを言って済みませんでした。今日はお帰りください。明日ご相談させていただきます」

「いや、君さえ大丈夫なら話を聞くよ」

梓は急いでベッドから降りると、デスクの引き出しからB5程度の茶封筒を持って来た。賢の横に腰掛けると言った。

「実は、母が倒れたのです。この写真は父からの連絡に添えられていたものです。」

梓はそう言うと、茶封筒からL版の写真を取り出した。5枚あった。3枚が母親の様子を写したもので、ベッドに横になっている写真、介護師に食事を食べさせてもらっている写真と入浴させてもらっている写真だった。残りの2枚は父親が母親のベッドの横で看病している写真と、父親が杖を突いて歩いている写真だった。

「父がしっかりしてくれれば、まだいいのですが、父も足腰が悪くて、ほとんど介護ができるような状態じゃないようなのです。妹が居る

のですが、家族の面倒を看なくてはならないので北海道に行くことはできないと言ってきました。わたくししかいないのです。今は父がデイサービスの介護師さんに、自宅に来ていただいて介護を受けているようですが、それは一時的な契約で、長くはお願いできないようです。介護老人ホームに入館したらどうかと、老人ホームの会社から、勧誘があるようですが、母はおぼつかない言葉で、「絶対嫌だ」と言っているようなのです。賢さんどうしたらいいと思われませんか？」

「今の日本人なら誰でも出会う問題だね。ご両親にこちらに来ていただいたらどうだろう？」

「はい、わたくしもそのことを父に伝えたのですが、母が嫌だと言っているようです。父も大分疲れていて、いまさら、動きたくないと言っています。賢さんならどうします？」

「僕が君なら、北海道に戻るよ。そこで生きることにする」

「わたくしは、どうしたらいいと思えますか？」

「それは、君の選択だよ。君の人生だからね」

「わたくしが帰らなくても、両親は老人ホームで生きてゆくことはできます。時々わたくしや、妹が訪問すれば、両親も喜ぶでしょう」

「君がそう望むなら、そうしたらいいよ」

「いいえ、本当は、両親の元に戻りたいのです。でも、わたくしは賢さんの女房役をやめたくありません。それで悩んでいるのです」

「そういう時こそ、自分の意識に従うんだよ。意識が何を一番望んでいるかだね。今晚、瞑想して、自分自身と向き合ってみるといいよ。自然に答えが見えてくると思うよ。いずれにしても、一度北海道に帰った方がいい。ご両親に君の姿を見せて、安心させてあげた方がいい」

「でも、明日は海外の訪問先のアポイントメントを取らなくてはなりませんし、出張のための準備もあります。北海道に行くのは無理です」

「梓、心配要らない。僕が全部やっておくよ」

「でも、リーダーの負担が大きくなりすぎて・・・」

「大丈夫だよ。それなりのやり方があるからね」

梓は、急遽、翌朝北海道の実家に帰ることになった。賢はこれまで、会

社の人たちに合わせた仕事の処理速度で業務を行っていたが、出発までの3日間は自分の仕事の処理速度を10倍スピードアップすることを意識した。梓は賢の全行程のスケジュールを把握しておき、自己判断で賢に合流することになった。賢がマンションに着いたのは11時半を回ってからだった。愛子は既に床に着いていた。亜希子は一人で書物を読んでいた。

「亜希子、3日後にまた海外出張することになったよ。今度は1ヶ月近く海外に居ることになるんだ」

「あなた、わたくしをひとりになさるおつもりですか？」

「お父さんから何も聞いていないのか？」

「わたくしは、ここに居る間は一切家とは連絡を取っておりません。家からの電話は着信拒否するように設定しています」

「どうして、そこまでするんだ？」

「どうしても。祐子お姉さまがあまりにも可愛そうで、そして、父のことをどうしても許す気になれなくて……」

賢は、亜希子がそれほどまでに祐子のことを慕っていたことに驚きを感じていたが、父親に対する頑ななまでの拒否反応を、不思議に思った。亜希子の穏やかな性格からは考えられない行動だった。しかし、賢はそのことに附いてそれ以上糺すことはしなかった。

「あなた、今日は一緒にやすんでいただけますか？とても悲しくて……」

「うん、分かった。シャワーを浴びてくるから。それから、出張は亜希子も一緒に行くんだよ」

「えっつ！本当ですか？」

その夜の亜希子は、賢にしがみついて離れなかった。

翌日の賢の動きは、周囲の者達を驚嘆させた。傍から見ると実際に10倍以上の処理速度で仕事をこなしているのが分かった。朝一番で、アメリカとのコンタクトをとり、訪問予定の箇所のアポイントメントを取ることができた。アポイントメントとは言っても、相手は単なる表敬訪問に近いものだと感じているようだった。詳細仕様の詰めは、会議への出席を楠木に任せ、全て事務処理に徹した。出張予定者の小塚と長谷部に

通達を行い、準備を開始させた。5社との連絡は全て電話で行った。出張の行程表は詳細仕様の詰めの中に処理して、午前中に出来上がり、それを梓の携帯やその他の関係者のPCにメールで送付した。政務次官には丁重に詫びて、電話で報告することを許してもらい、出張計画を細かく説明した。長谷部に自分達二人分のインドのビザ取得に行かせた。他の3人のビザはまだ有効期限内だ。香川の居るケニアのビザは賢と亜希子、梓は前回取得済みである。アフリカで経由する可能性のある国のビザは全て取得してあった。若手二人の分は時間的に無理なので、現地での取得を試みることにした。午後は先ず、出張者全員分の航空券の手配を済ませ、ステアリングメンバーとの個別の会合をこなし、午後3時には香川とのコンタクトにも成功した。それからはスウェーデン、インド、中国の訪問予定の施設の連絡方法を調べ、個別に全て電話で訪問の許可を得た。6時を過ぎて、問い合わせの待ち時間を省くため4本の電話機を使って国際電話で、英語を交え同時に4人と会話をしているときは、残業で残っている者たちが、ぼかんとして賢を見つめていた。どうしても中国だけは直接会話することができず、海外営業の中国担当者に電話口に出てもらい、3者通話で通訳してもらいながら相手に訪問を受け入れてもらった。午後8時には自分と梓の予定していた全ての業務と、今後1週間以内に発生の見込まれる業務を処理してしまった。家に帰ろうとしたとき、梓から電話が入った。

「リーダー、わたくしのために、申し訳ありませんでした。出張の行程表ありがとうございました。あまりに早く出来たので驚きました。いろいろな手配はどうになりましたか？」

「うん、全部終わったよ。後はeチケットを発行するだけだ。若手二人のインドのビザは明日取れることになっている。それより、ご両親の具合はどうだ？」

「ありがとうございます。母は一時の危ない状態からは抜け出していて、安定しています。むしろ父の方が気が弱くなっていて、心配になりました。でも元気付けました。二人とも、わたくしの姿を観て安心したようです。「あんたが来てくれて、本当に嬉しい。だけど、仕事が忙しいん

だろう、時々こうして来てくれるだけでいいんだよ。いずれは動けなくなるんだから、お父さんの足の具合が悪くなったら、二人で同じ施設に入ることに決めたよ。だから、心配しなくても大丈夫だよ」つてもつれる舌で言ってくれました。わたくしは後1日こちらに居てから、東京に戻り、その翌日リーダーと一緒に出発します」

「梓、無理をするなよ。体は大丈夫か？」

「大丈夫です。今度はビジネスクラスですから、飛行機の中で寛ぎます」その日はマンションに帰ると原が来ていた。是非実験を観て欲しいと言った。賢は自分の帰りを待っていた亜希子と二人で食事を摂りながら、既に愛子と二人で食事を済ませ、テーブルに得体の知れない機械を置いていじっている原に対して、何の実験なのか尋ねた。原は言った。

「賢さん、驚かないでくださいね。終に出来たんですよ。バイロケーションマシン」

「えっ？バイロケーションって、電子の現象だろう？」

「それが無機質の分子構造体でも可能なことが分かったんです。つまり、普通の物質を転送できるマシンです。早く食事を終えてください」

「物質転送機？ 本当に？」

「まだ、物質転送ができるわけじゃありません。確率的に、2つの位置のどちらかに存在する状態を作り出すことができただけです。だから、バイロケーションの物質版とでも行ったらいいでしょうかね」

賢は急いで食事を済ませた。賢が食事を済ませても亜希子はまだ食べ終えていなかったが、直ぐに片付け始めた。愛子が立ち上がって来て、亜希子を手伝った。原は後片付けが終わるのを待った。全員がソファーに掛けると、原はマシンのデモを始めた。先ず、2本の角のような突起の出た昔の8ミリ映写機のような形をしたマシンの角の突起部分を引っ張って伸ばした。角の先には皿のような器状の物が附いている。

「皆さん、いいですか、このトレイの上に何かを載せます。そして、マシンのスイッチを入れると、こっち側の別の皿の上にも同じものが現れます。でも、どちらかのものを持ち上げると、別の方はその瞬間に消えます。両方にあるように見えますが、選択された方だけが存在として、

確定されることとなります。賢さん、ちょっとやってみてください」
賢はポケットから財布を取り出し、コイン入れから100円玉を1枚出して、原の示した左側のトレイの上に置いた。

「賢さん、いいですか？じゃ、スイッチを入れますよ」
原がスイッチを入れると、直ぐに右側のトレイの上に、もう1枚の100円玉が現れた。

「良く観ていてください。今、100円玉が2枚あるように見えているでしょう。でも、実際はどちらか1方にだけあるのです。じゃ、亜希子さん、好きな方の100円玉を取ってみて下さい」

亜希子は、右側の100円玉を掴んだ。すると、その瞬間に、賢の置いた左側のトレイの100円玉が消えた。賢が拍手をしながら言った。

「凄い。原さん、これは凄いことです。物質転送機そのものじゃないですか」

原は、首を横に振って言った。

「いいえ、そんな大それたものじゃありません。この機械に取り付けた二つのアームの先の2つのトレイ上で、確率的に存在させてみただけです。転送しているわけではありません」

「ということは、100円玉の構成要素に附いて分析は行っていないということですか？」

「そうです。この二つのトレイのある時空間の次元を一つ上げてみただけです。良く観てください、二つのトレイとその間の空間が見えにくくなっているでしょう。この部分を4次元空間に切り替えたのです」

「どうやって？そんなに簡単に次元を切り替えられるとは思えないのですが・・・」

「賢さん、強いエネルギーを与えるとその時空間が歪むのはご存知でしょう。だから、この部分にエネルギーのループを作って、エネルギーが無限大になる共振を起こさせたのです。実際には損失がありますから無限大にはなりません、マシンが破壊されることがありませんから、結果的にはその方が好都合です。でも、それだけじゃ、バイロケーションはできないでしょう。そこで、ポテンシャルエネルギーを二つの皿の上

に同時に発生させ、そのエネルギーの照射を確率関数を用いて制御したのです。ですから、ただ単にトレイの上の場が確率的に変化している状態を作っただけなのです。その上で、左側のトレイ上の存在のフォログラフィのイメージを右側のトレイ上にコピーしたのです」

「なるほど、でも、イメージのコピーだと、映像的なものしか現れないんじゃないかって思えるけど」

「僕も初めそう考えたんですが、それが、存在そのものが現れたんです。多分、“ものは認識されると存在が固定化される”という法則があるようです。フレミングが偶然アオカビからペニシリンを発見したでしょう、あれと同じですよ」

それから1時間ほど、4人でいろいろなものを実験してみた。バイロケーションできるものと、できないものがあることが分かった。有機質系の物質の内のいくつかはできなかった。無機質系のは複雑な構造のものでうまくいった。亜希子が腕時計を試してみたが、見事にバイロケーションできた。女性達は飛び上がって喜んだ。亜希子と愛子の突然の喜びように、二人の男性はビックリした。原は12時頃まで居たが、賢が眠そうなのに気付いて、マシンを大切に抱えて引き上げて行った。

キガリ

看護婦の再編成がなされ、ピピもマリゼもキヴに移ることになった。祐子は夜になると、止め処なく悲しみが襲ってきて、自分の身を持て余してしまった。今はキガリのキャンプには、お互いに悲しみを打ち消しあえる親しい友もいない。悲しみはまるで砂浜に打ち寄せる波のごとく、押し寄せてきては引いていった。そしてその悲しみが、砂に吸い込まれてゆく水のように重く身体の中に沁み込んでくるのが分かる。

「自分は、このルワンダを天国にするために、通らなければならない険しい道を選んだ。何故これほどまでに、この道は過酷なのか？これでもか、これでもか、というほど自分から大切な人たちを奪ってゆく。自分

は何故人々のことをこれほどまで、愛おしく感じてしまうのか不思議だ。愛おしさが募れば募るほど、失ったときの悲しみは大きい。もう自分はこのまま悲しみに押しつぶされるのではないか。両親を失い、賢から引き離され、スージを失い、バラックを失った。誘拐船の船底で一度は捨てた命だったが、自分を愛する人に救われた。そして、今では、多くの人たちが自分を愛してくれている。自分が愛を与えれば、与えるほど、その何倍にもなって、他の人々から愛が帰って来る。賢のことをこれほどまで愛おしく、苦しく思うのは、まだ自我があるからなのだろうか？自分は再び、自我を捨てる決心をしよう」

目を瞑ると、賢と二人で登った高尾山の思い出が、ありありと現前するのだった。自分が心で誓った、永遠の伴侶。どうして自分はその最も大切なはずの伴侶と会うのを拒否してまで、ルワンダの人たちと共に生きようとするのか？思考では説明できない、強い衝動に動かされていたのだった。夜の1時を回っていたが、意識ははっきりしていて、目が冴えていた。ふと、ドアをノックする小さな音が聞こえた。良く聞き取れなかったが、少ししてまたノックの音がした。確かにこの部屋の扉をノックしている音だった。祐子はベッドから降り、身づくろいを正してドアを開けた。一人の40歳くらいの痩せた、身体の弱そうな男性が立っている。祐子はそれが気の弱いマラニユカだとわかった。

「*****」(マラニユカどうしたの？こんなに夜遅く)

祐子が聞いたが、マラニユカはもじもじして、何も言わずに下を向いている。祐子はマラニユカに部屋の中に入るように言った。マラニユカは、その場に立ったままである。

「*****」(どうしたの？どこか具合が悪いの？)

「*****」(・・・ママに聞いてもらいたいことがあります)

「*****」(ドアを開けたまま、立ち話というわけには行かないわ。

さあ、中にお入りなさい)

マラニユカは祐子に言われて、そろりそろりと部屋の中に入ってきた。祐子はマラニユカを机の椅子に座らせ、自分はベッドの縁に腰掛けた。

「*****」(さあ、いいわよ。何でも話してください)

マラニューカは、ポツリポツリと話し始めた。

「*****」(ママ、ぼくは・・・どうしたら許してもらえますでしょうか？みんなに済まなくて、でも、きっとみんなは許してくれないし・・・)

「*****」(どうしたの？何か失敗でもしたの？)

「*****」(・・・ぼくは、みんなを売ったのです。そうしないと、僕が殺されちゃうから・・・)

「*****」(それは、この間の襲撃のこと？)

「*****」(いや、違うよ。・・・前に、仲間が大勢殺された。ぼくが、みんなの居場所をやつらに教えたからだ。あのときバラックの家族も殺された)

「*****」(そうだったの。それで、あなたは、みんなの仕返しが怖いよね)

「*****」(毎日、怖くて眠れない。それに・・・夜になると、悪魔たちが僕のことを唆(そそのか)しに来るのです。「こいつらをみんな殺しちゃえ」って「殺される前に殺しちゃえ」って。ママ、ぼくはどうすればいいだろうか？)

「*****」(マラニューカ、よく話してくれたわ。もう大丈夫よ。過去のことはわたしが許してあげる。いいわね、これからあなたのことは、わたしが守ってあげる。だから、毎日寝る前に、神様に自分の間違っただ行を謝りなさい。悪魔が出てきたら、「ぼくのことをママが守っているから、消えろ」って言うのよ。いい、それでも悪魔が消えなかったら、これから言うおまじないを唱えるのよ。そうすれば悪魔は退散するわ。よく覚えるのよ。いい・・・「この世は光。悪魔は影、ママの強い光がぼくを守る。ママの光で悪魔は消える。解けてしまう前に、さあ早く逃げなさい」この言葉を言えば、悪魔は近づけないわ。)

マラニューカは目に涙を溜め、ベッドのふちに腰掛けていた祐子に跪いた。

「*****」(ママ、ぼくの神様、ぼくの命をささげます。これから、ぼくはママのために生きてゆきます)

祐子はマラニューカの腕を取って立ち上がらせると、励ますように彼を見送った。祐子は自分の話した言葉が思考を経由しないで、自然に口から

出てきたことに驚きを感じた。静かに瞑目し、バラックとその家族、そしてすべての命を落としたブチの人々、いまでも苦しんでいる人々の安寧を祈った。深い呼吸の中で祐子はいつしか眠りに落ちた。

翌日、祐子はブチ族の長老たちを招集していた。ブチ族がこれからどうやって生きてゆくべきかについて、討議する為だった。57人の長老がキヴの岩陰にある茅葺きの集会場に集まった。先ず、祐子が口火を切った。

「*****」(みなさん、よく集まってくれました。今日はこれから、ブチの生きる道について、討論したいと思います。これまでのように、クツとの戦いを続けていたのでは、わたくしたちに平和な生活は訪れません。どうしたら、互いに憎しみあう気持ちを捨て、穏やかで不安のない生活を送ることができるか、是非考えていただきたいと思います) 一人の長老が話し始めた。

「*****」(ママ、われわれは長い間、そのことを思い、どうしたら、いいのか考え続けてきました。でも、襲撃を受けるたびに、憎しみの気持ちは大きくなり、相手が居なくなるのがもっとも平和になる近道だと考えるようになってしまいました。今日、ここで討論しても、結論は出ないと思います)

「*****」(そうですね、あなた方はずっと、努力してきました。でもまだ100年悩んだわけではありません。今日はわたくしにひとつの考えがあって、みんなに集まってもらったのです。わたしの考えをお話しする前に、これまでみんな考えてきた、理想的な生活について話し合ってみましょう)

長老たちの内の何人かは、祐子の話が聴けるので眼を輝かせた。一人の長老が言った。

「*****」(ママ、ブチは土を耕し、天から与えられる恵みで生きてゆくしかないと思います。みんな必死に土を耕し、その潤いで強力な軍隊を作り、敵が近づけないようにコンクリートの壁と鉄条網で囲いをして、その中で生きて行くのがよいと思うのです。そこは平和な世界になると思います)

「*****」(そうですね。それもひとつの考えですね。みんなが一
生懸命土を耕す。すばらしい姿ですね。それで、軍隊がなくてもよけれ
ば、もっとすばらしいでしょうね)

もう一人の長老が言った。

「*****」(ママ、崖の上に砦を作り、そこに軍隊を常駐させたら
どうでしょう。その崖の向こうに広い土地を確保して、そこでブチの人
たちが外敵から襲われることなく、平和に生きるのはどうでしょう?)

「*****」(それも、すばらしい考えですね。崖の上に砦があれば、
敵は近づけないでしょうね。その向こうに平和なブチの村々がある。み
んな安心して生活できるでしょうね。そういう場所があればとてもいい
考えだと思います。砦が無くても、大丈夫なら、もっといいでしょうね)
それから、何人かの長老が話しをしたが、その何れも、どうやって敵の
襲撃から逃れて、安全に生きるかを考えたものだった。長老たちの意見
も出尽くしたので、いよいよ祐子が自分の考えを話すことにした。

「*****」(ルワンダは、昔ほどの部族も自分たちが生きること
に必死で、ほかの部族を襲撃するなどといったことを考えるようなことは
しませんでした。まして、自分たちの部族以外の部族を殲滅させような
どという恐ろしい考えを持つような人は誰もいませんでした。わたしは、
ルワンダをその昔の状態、いいえ、それ以上にしたいのです。部族間が
協力して、国を強くしてゆくような仕組みを作れたらいいと思うのです)
そのとき、一人の額に3本の深い皺のある、白い顎鬚を生やした長老が
言葉を挟んだ。

「*****」(ママ、そんなことできるわけではないですよ。これだけ
多くの人が殺されたのです。許せるわけではないでしょう)

「*****」(そうですね。でもね、日本には原爆を落とされた過去
がありますが、その原爆を落とした国と、友好関係を結んで、お互い助
け合っていますよ。・・・とりあえずわたしの話を聞いてください)
周りに居る何人かの長老の「そうだ、そうだ」という言葉に、口を挟ん
だ長老はたじろいでしまった。

「*****」(わたしは、安全を確保してから、豊かになるのでなく

て、豊かになってから、次第に安全を強化する方向を目指したほうがいいと思うのです。豊かになるのはブチだけでなく、クツも同じです。豊かになると、相手を思いやる余裕も出てきます。覇権ではなくて協調の結果としてね)

先ほどの白い顎鬚の長老がまた、口を挟んだ。周りの長老たちの制止を押し切るように話し始めた。

「*****」(ママ、確かにママのおっしゃることはわかりますが、じゃ、実際にどうすればいいのか、話してもらえませんか?)

「*****」(そうです。そこが重要なのです。ルワンダにはコーヒーやココア、そしてお茶などのとても品質のいい農産物があります。今は、それぞれ個人的に、あるいは小さな町内で作付けして収穫し、それを販売しています。ですから、外国の企業も、それぞれの農場に、買い付けに訪れます。それを、もっと規模の大きなものにするのです。協同組合のような・・・協同組合ってわかりますか?みんなで力を出し合って、大農場を経営するのです。そして、その産物は、ひとつの窓口で対外交渉して、いい条件のところと取引するのです。たくさんの人たちが協力することによって、農場の自動化もでき、産出高も大きく伸びるはずです)

また、白い顎鬚の長老が言った。

「*****」(クツの襲撃をどう躲すのですか?)

その隣に座っていた長老が白い顎鬚の長老に食って掛かった。

「*****」(ボドルビ、文句ばかり言わないで、話を聞けよ)

祐子は言った。

「*****」(いいえ、いいのですよ。ボドルビさんも、ブチのために思って言っているのですから。・・・その、クツのことですが、わたしがクツに出向きます。そして、平和協定を結ぶことができます。お互いに殺しあうことはやめよう。もう、過去のことを蒸し返すのはやめて、お互いの未来、ルワンダの将来について考えようと訴えてきます)

ボドルビ長老が言った。

「*****」(ママ、殺されちゃいますよ。ママはブチの族長ですよ。)

クツはあなたを、黙って帰すわけがありません。酷い屈辱をお受けになりますよ。そして、挙句の果てに……それは、絶対に駄目です) 周りに居た5, 6人の長老が「ママに対して礼を失している」と言ってボドルビを責めた。祐子は微笑みながら言った。

「****」(わたしの命は皆さんのためにあるのですよ。こんなときに使わなければ、使うときはありません。大丈夫ですよ。見ていてください)

その日の会議は祐子の話で終了した。解散になると、長老たちは、キヴの視察をして、先日の襲撃で犠牲になった人々の墓に参ってから自分たちの居住区に戻って行った。

それから3日後、祐子は護衛を兼ねた側近として、長老たちが自分のために配置した兵士サスカブに頼んで、鹿島と連絡を取ることにした。サスカブの話聞いて鹿島は踊りあがって喜んだ。祐子と会うことは絶望的だと考えていた矢先だけに、あまりの嬉しさに会合の時間と場所を確認することを忘れてしまったほどだった。サスカブが立ち去って直ぐに我に還り、追い掛けてバイクに乗り掛けたサスカブを捕まえ、やっと確認できた。二日後、鹿島は祐子の家に出向くことになった。祐子の家と聞いて、鹿島は何となく違和感を覚えた。しかし、何故か分からなかったが、自分の頬を涙が流れ落ちるのを感じた。「祐子さんに会える、それも祐子さんの家で会える！」鹿島は興奮してその夜は眠れなかった。祐子はバラックが使っていた書斎を自分の事務所に使っていた。鹿島とはそこで会うことにした。祐子の腹部は、はっきりと目立つようになっていた。バラックを失った今、もう誰に知られてもよいと心に決めていた。鹿島は緊張していた。サスカブに誘導されて、バラックの家まで辿り着くと、気を引き締めてその門を潜った。手入れを何もしていない木々の茂みの中を進んで家の入り口まで来ると、サスカブは鹿島に車の中で待つように言った。家の中に消えてから、2, 3分して、サスカブは恰幅のよい、女仕官のような女性と連れ立って家の中から出てきた。鹿島は直ぐにはそれが祐子であることに気付かなかった。それほど祐子の姿は鹿島の知っている祐子のイメージとかけ離れていた。祐子は現地の女性

が身に着けているような服装をしていた。赤っぽいアフリカの布キテンゲを使った長いワンピースを着ていて、頭に黒い布を巻きつけている。鹿島は普段現地の女性達の服装を見ているのだが、地に着くほど長いワンピースを身に着けた祐子の姿は、鹿島に、ルワンダの女性というよりむしろ、サリーを身に纏ったインドの女性のような印象を与えた。鹿島の近くに來ると祐子はにっこり笑った。

「鹿島さん、久しぶりです。お元気そうですね」

「お久しぶりです。・・・祐子さん、ずいぶんお変わりになりましたね。

本物の祐子さんですよ」

鹿島は目頭が潤むのを感じた。祐子がこの数日でどうして急に考えを変えたのか不思議だった。祐子は少し微笑むと、鹿島を案内して家に入った。サスカブが祐子と鹿島の間に入って歩いた。常に鹿島に視線を向けて、警戒しているのが分かる。事務室に通されると、鹿島はそこがあまりにも広い空間であることに驚いた。壁には大きなルワンダの地図が張ってあり、無数のピンが打ってある。大きな書棚にはぎっしり書籍が詰まっている。机の上には書類が山積みされていて、まるで、軍の戦略室のように見えた。祐子が鹿島に椅子を勧めながら言った。

「随分いろいろなことがありました。いま、わたしは毎日意識を全開させて生きています。」

「祐子さん、あなたとママユウコは同じ人ですか？」

「はい、同じです。でも、近頃はユウコが取れてママと呼ばれていますよ。もう、わたしはユウコじゃないのかもしれませんが」

「どういう事ですか？」

「自分が無いんですよ。“ブチのみんなのわたし”なんです。それで、とても充実しているんですよ。鹿島さん、わたしの身体をご覧になって気が付いたでしょう。そう、わたしは身籠っているんですよ。ブチの族長だった人の子供です。先日亡くなってしまいましたけれど。それで、今までは誰にも会えないと考えていましたが、今は違います。もう恥ずかしさは無くなりました。そんなことより、どうしてもあなたに会って、お願いしたいことがあります」

そう言うと祐子は悲しそうに俯いた。鹿島は祐子の悲しみが、自分の知らない世界から来ていることに一抹の寂しさを覚えた。祐子が身籠っていることには触れずに言った。

「随分辛い、悲しい思いをされたんですね。僕にできることでしたら、何でもおっしゃってください。あなたを助けるために、全てを捨ててここに来たのですから、何でもやります」

「鹿島さんが、わたしにそんなことをおっしゃってくれるとは、夢にも思いませんでした・・・実はわたしは今、命を賭けた事業に取り組み始めたんです。それには、是非ともあなたの協力が必要なんです」

「何でも言うてください。ぼくのできることなら、何でもやります」

「あなたはアフリカでコーヒー豆の買い付けをやっていると聞きました。現在はどんなところから買い付けているか教えて欲しいんです」

「これは、商売上の秘密事項ですから、他言はしないでください」

そう言うと、鹿島は自分の書類バッグから1冊のノートを取り出して、それを祐子に渡した。

「そこに、全ての取引先名が書いてあります。ブチ族とは5つの農場と、クツ族とは7つの農場と契約しています。まだルワンダでは産出量の予測なんか難しいから、できるだけ沢山の農場と契約したいんです。ところで、この家はバラックさんの家でしょう。彼とも契約していますよ。最近、彼とは会っていませんが」

「彼は亡くなりました」

「えっ！どうして？」

「この間、襲撃を受けて、それで・・・大勢の人が亡くなりました」

「そうだったのですか。知りませんでした・・・お悔やみ申し上げます。もしかして・・・」

「そうなの。彼の子なのよ。だから、わたしが彼の後を引き継ぐことになったの。ブチの命運はわたしに懸っているのよ」

「分かりました。ぼくは何をすればいいんでしょう？」

「わたしは、ブチの人たちが個人で農場を作って、そこでコーヒー豆などを作って、それぞれ勝手に販売する方式を改めようとしているのです。

一つの大きな機関を設立して、そこが全ての取引、販売、生産管理、品質管理なんかを行うようにしようと考えているのです。それで、あなたに協力していただきたいのです。わたし達のやり方を受け入れて頂いて、今後の取引を全てその機関を通して行うようにしていただきたいのです。現在は5農場ですが、小さいものまで入れると、20近くあると思います。それを全て一元化して効率を高め、ブチの人たちの生活を楽にしたいのです」

「そういうことでしたら、我々も望むところです。僕も微力ながら、その機関を設立して組織化することをお手伝いいたします。日本の本社にも協力してもらえるか相談してみます」

「鹿島さん、ありがとうございます。でも、わたし達の新しい機関に対して、手かせ、足かせをはめることだけはしないでいただきたいのです」

「勿論分かっています。がんばってやり遂げましょう」

「まず、初めに何から始めたらいいんでしょうか？」

「まずは、各農場主の間の合意を得る必要がありますね」

「それは、長老会議で頼みました。皆、協力してくれるようです」

「そうですか、それなら、後は事務的な仕事です。先ず、その機関の創業の理念と目的、それに業務範囲を決めます。そう、日本の企業設立時に作る定款のようなものを作成します。それを示すことで、合意を得られる人々から基金を募り、資本金を準備します。集めたお金で、小さくてもいいから、事務所を開く準備をし、それから、最低限必要な人間を集め、その中で組織長を決めます。代表者が決まったら、キガリの役所に行って、機関の設立の許可を得てきます。祐子さんは、資本金を集めるところまでがんばってください。日本の本社に相談してもいいですが、条件付けをさせないためには、半分以上の資金は自分達で用意する覚悟をしたほうがいいでしょう。その後は僕が手伝います。それで、取り扱う産物はコーヒーだけですか？」

「今は、コーヒーだけですが、いずれは女性達を作るバスケットや、衣類なども扱いたいと思っています。ジェノサイドで夫を亡くした女性が多いんです。彼女達は、特に子供の居る家では、毎日の食料に事欠くよ

うな生活をしています。彼女達の中には、果物などを入れるプラトと呼ばれるバスケットやアガセケという女性達の貴重品を入れる、ルワンダ特有のバスケットを作って、それを町に売りに行って、その稼ぎで生計を立てている人たちもいます。でもあまり、売れないんです。そのアガセケは細かい細工を施すと、高級な工芸品に仕上がると思うんです。わたしは、それを作る作業場を今度の機関に用意しようと思っています。この辺りで採れるサイザル麻を使って作るのです。結構丈夫な素材なんですよ。バスケットの内側はイシングという草を使うんです。いろいろな色づけをするので、それは、とってもきれいなんですよ。これ、世界中で売れるんじゃないかと思うんです。インテリアにしても、素敵だし、勿論実用にもできますから……あら、わたし、バスケットの話ばかりして、自分が好きなもので、つつい……それで、コーヒーのことですが、これは鹿島さんの得意分野でしょう。わたしもルワンダのコーヒーの品質がいいのを知っています。ただ、一樣な品質を確保するようなシステムがありませんから、収穫する年と採れる場所によって味に差が出てしまうことがあるんです。これでは、一流のブランドになることはできません。ですから、その品質管理を今度の機関で行おうとしているのです。それで、価格も安定するでしょうし、市場での価値が上がってくるように思います。各農場に対して今度設立する機関がその指導を行うようにしようと考えています。そして、最後にこの機関で、輸出に関する業務を行い、できたら将来は輸送関係の業務まで扱いたいと考えています。もう一つのわたしの望みは、夫や家族を失って生活に困窮している人たちに、低金利で融資を行い、資本参加させることです。売り上げの中から、投資金額が少ない場合には、より高率の配当を行うしくみを組み込みたいのです。詳しいことはこれから検討してゆきますが、投資した人たちの、生活状況を鑑みて、融資の変換猶予、配当額の上積みなどを行う仕組みを作ろうと思っています」

鹿島は驚いた。目の前に居るのはもう、過去の祐子ではなかった。ブチの社会全体の発展を考えている母だと思った。ブチの人たちが祐子のことをママと呼び始めたことが実感として感じられてきた。鹿島は、祐子

が拉致されてから、この日に至るまで歩んできた道に附いて、聞いてみたいという気持ちが沸いてきたが、それを言葉にすることはできなかった。それ程祐子の存在を大きく感じ始めていた。

祐子と会ってからの康介は、別人のようになった。周囲に居るNGOの人たちからも、明るくなったと言われるようになった。悲壮感が消えたとも言われた。康介にとって、最も重要な業務は祐子の機関を設立することだった。会社とのコンタクトの際も、ブチ族の新しい組織の説明と設立支援の必要性を強く訴えた。全ての計画が勢いを持って進んでいった。

祐子と会ってから3日目の夜、賢から電話が入った。2日後に賢たちが再び訪れる。康介は嬉しくなった。しかし、康介は祐子と会えたことは口にしなかった。賢たちにどう話そうかと思い、知らないうちに頬がゆるんでくるのを感じた。賢たちの驚く様子を思うと、急に大声で笑い出したくなった。

「わっはっはっはっは・・・」

フェニックス

再び海外出張に出掛ける日の前日の午後に、賢の元に梓から電話がかかってきた。北海道から戻ったとの連絡だった。梓は「支度は間に合います」と言い切った。賢が京成特急を使って直接成田空港に行くように言ったが、梓は一緒に行きたいと言った。梓は直ぐに切符の手配を行った。しかし、賢たちと同じ車両の席を予約することはできなかった。賢は朝、電話で梓が準備できたことを確認して、自分の荷物の最後の確認をしていると、亜希子に対して登紀子から電話があった。昨日、亜希子は父肇の留守を見計らって一度自宅に帰宅して来ていた。亜希子は自宅に戻ることは不本意だと思っていたが、前日登喜子から借りた写真を返さなければならなかったし、登紀子の是非来るようにとの哀願に抗うことができなかった。登紀子は1ヶ月近くも外遊するのに必要な衣類などをすべて用意していた。亜希子は自分で全部用意してあると言ったが、登紀子

は薬品や、漬物、磯辺焼きなどの日本のスナック類を沢山広げて見せ、その中から、必要なものを持ってゆくように亜希子に言った。亜希子は登紀子の気持ちを考え、全て持ち帰って来て、その内のいくつかを荷物の中に忍び込ませた。登紀子は亜希子に気を付けて行くようにと最後の電話を掛けてきたのだった。

「お母さま、ご心配には及びませんわ。わたくしは大丈夫ですから。それより、お母さまの方こそ、お体に気をつけてくださいね。時々腰が痛むとおっしゃっていらしたでしょう」

「亜希子さん・・・あなたの優しい言葉がうれしいわ・・・本当に気を付けるのよ・・・」

登紀子は涙声になっていた。

「お母さま、まるで、このままお別れするようですよ。一月で戻ってくるのですよ。大丈夫ですよ」

登紀子の涙声が亜希子の耳に残って消えなかった。亜希子は、もしかしたら、これが母との最後の会話になるのかもしれないと思った。そう思うと、亜希子の頬を涙が流れ落ちた。暫くして、賢は亜希子を労るようにしてマンションを出た。

「亜希子、お父さんに会わなくても良かったのか？」

「会いたくないのです」

「どうして、そんなにお父さんのことを嫌うんだ。祐子の転勤のことはもう過ぎ去ったことだから、いつまでもそんなにしているのはおかしいよ」

「わたくしが父を許せない訳、今はお話したくありません。あなたには、後でお話しいたします。許してください」

「そうか、じゃあ、もう聞かないよ」

東京駅の京葉線 NEX の乗車ホームで全員が待ち合わせた。賢と亜希子がホームに下りたときには、既に3人は着いていた。梓だけが違う車両に乗ることになった。同行する小塚と長谷部という梓と楠木の部下は、二人とも30歳で、同期入社だった。小塚は名前から受ける印象どおり小柄だったが、長谷部は背丈が175センチほどで、太って体格が良か

った。梓を除く4人は隣り合った4席を予約できていた。賢は梓との打ち合わせの必要性から、二人の男性に、どちらかが梓と席を替わって欲しいと頼んだ。梓の部下の小塚が「自分が替ります」と言った。電車に乗り込むと、賢は早速梓に今度の出張の計画について、詳細の説明を行った。梓は、旅程のタイムスケジュールを吟味した。梓の懸念はやはり、アフリカに立ち寄る際の、乗り換えのタイミングだった。一番の問題は、二人の部下のビザの入手だった。乗り換えの時間内にビザが下りるかどうかだと梓が言った。長谷部がそれに応えて言った。

「自分達が足手まといになるようなら、別行動にしてもかまいません。そのときは遠慮なくおっしゃってください」

その言葉を聴いて、梓は頷き、それ以外に大きな問題は無さそうだと言った。梓も自分なりに旅程の検討をしていたようだった。

飛行機の中では5人が1列の席を確保できた。賢は亜希子と梓の間の席に座った。賢たち3人は食事の後、直ぐに睡眠をとった。二人の男性は映画を観たり、ワインを飲んだりしていた。ロサンゼルスで乗り換え、フェニックスに着いたのは時差の関係で出発前日の午後3時頃だった。この日は賢の母が一人で出迎えてくれた。再び賢に会えたことを非常に喜んだ。父は手術があるので来られないと言った。母はワゴンのレンタカーを借りてあった。この日は母に案内されて、メキシカンレストランで夕食を共にした。食事が済むと、賢は4人をフェニックス市内のプレジデント・スウィート・ホテルで降ろして、母とともにスコッツデールの両親の家に向かった。母は賢が前回の出張で経験したことについていろいろ訪ねた。賢が話すさまざまな体験の話を、微笑みを浮かべて聞いていた。しかし、そのこと自体に大きな驚きも示さなければ、軽くあしらうこともなかった。事実を事実として、確認しているようだった。ただ、賢が近くに居てくれるだけで幸せだと言った。父が病院から帰ったのは、夜の1時を回ってからだった。父は大手術で疲れ切っていた。しかし、賢の姿を観ると途端に活気付いて、「これから一緒に呑もう」と言ったが、母は、賢が明日早くに出るので、父にも早く休むことを勧めた。シャワーを浴びさせ、用意してあったステーキを直ぐに焼いて食

べさせ、父が床に着くまで至れり尽くせりの世話をした。父は、疲労感で脱力的な状態になっていて、元気が無かった。母は父が手術に執刀したときは、いつもステーキを用意していた。手術が成功したときは、父は上機嫌で、ワインを飲みながらステーキを楽しんだ。しかし、結果が良くなかったときは、ただ黙々と食べて、直ぐに床に潜り込んだ。賢はそんな父の日常の姿が、はっきりと記憶に残っていて、この日の手術の結果が、あまり芳しくなかったことを見て取った。母もそれを分かっている、酒を呑まないようにさせたのだった。

賢の意識は一晩中覚めていた。肉体には休息を与えたので、目覚めは良かった。翌朝、賢は寝入っている父を起こさないように、車に荷物を積み込んで家を出た。母が外まで見送りに出てくれた。この日はフェニックスにある意識改革センターを訪問することになっていた。亜希子たちは既にチェックアウトを済ませ、ホテルのロビーで待っていた。意識改革センターを訪問してから、そのままサンシティーに向かう予定だった。全員の荷物を積み込むと、亜希子が助手席に乗り、梓たちが後部座席に乗った。ダウンタウン・フェニックスにあるマリコパ郡庁舎には約束の15分前に着いた。駐車場に車を止めると、5人は暫くそこで時間を潰してから、エントランスを入った。受付で場所を確認して、6階35号室のパトリック・ローゼンシュタインの部屋を訪れた。そこには50歳くらいのおごひげを蓄えた、彫りの深い顔をした男性がデスクの向こう側に座っていた。

「Hello, welcome to Maricopa County Department office. My name is Patrick Rozenstein. Nice to meet you.」（こんにちは、ようこそマリコパ群局の事務所にお越しくださいました。わたしはパトリック・ローゼンシュタインです。お会いできて光栄です）

賢が代表して挨拶した。

「Hello, We are the member of human conscious development group in Japan. We appreciate you would accept our proposal for the study on the progress of the human conscious development project in the United States.」（こんにちは、我々は日本の人間の意識改革グループの

メンバーです。アメリカにおける人間意識改革プロジェクトの経過について学ばせていただきたいというお願いを、受け入れてくださいます、感謝いたします)

5人はそれぞれパトリックと握手を交わし、名刺交換を行った。パトリックは、隣の部屋に通じる扉を開け、5人に中に入るように案内した。そこは小会議室であった。パトリックの勧めで、全員会議テーブルに着いた。

「****」(このプロジェクトが始まって、もう3年が経過しましたが、人間の意識を変えるということは、至難の業だということが分かってきました。人はそれぞれ、独自の考えを持っていて、特にこのアメリカでは、自由な発想とそれに基づいた行動が重要視されていますから、それを同じ方向に引っ張ることが、如何に難しいことか身に沁みました)いきなり、パトリックがそっくり始めた。賢は、直ぐに質問した。

「****」(そもそも、このプロジェクトの目的は何処にあったのでしょうか?)

「****」(この国は、もともと自由と平等を掲げて、建国された国です。しかし、その自由の中でアメリカンドリームを求める自由が、平等な社会を作ることを押し潰してしまいました。ご存知のように極端な格差社会を作り上げてしまいました。「その格差は、一生懸命頑張って生きてきたか、あるいは放漫に過ごしてきた結果だ」と考えられる余地を奪ってしてしまったのです。貧しい人の大半は、どんなに努力してもいつまでも貧しく、豊かな家庭に生まれた人は、初めからその富で、あらゆる自由を手に入れています。これが先進国の先頭を走る国の姿として、望ましいものかどうか、多くの知識人たちから疑問が提示されたのです。勿論国会や、州議会ではそういうことは検討テーマにさえなりませんでした。それはほとんどの議員達が富裕層の人たちだからです。そんなことは問題でないと考えました。努力次第で、どんな地位にでも就けるし、どんな金持ちにでもなれる。という考えを固辞し続けたのです。そこで、5年前に改革意識を持った、ある市民団体のグループが多数の国民の署名を集め、国会に直訴したのです。それで、人々が真の自

由と平等を得られるようになるよう、人々の意識を改革する必要があるという結論に到達し、それを如何に実現するかを検討することになりました。それがこのプロジェクトのきっかけであり、目的です。まず初めにモデル地域としてアリゾナ州のマリコパ群が選ばれました。最も発展の速度の早い地域のうち第2位のバックアイ、第3位のサプライズ、第4位のグッドイヤーそれからエイボンデールここも第9位ですが、これらの4都市を含んでいますし、それらの4都市が全てフェニックス市西側の「ウェストバレー」地区にあるため、集中した調査がし易いためです。それに郡内には5つのインディアン居留地があります。この内最大級のものはスコッツデールの東、ソルト川ピマ・マリコパ・インディアン社会とフェニックスの南、ヒラ川インディアン社会で、どちらもカジノを運営しています。インディアンの人たちのそのような生き方が、本来の姿なのかどうか。そして、北の地域にはホピやナバホという、今でも昔からの生き方を維持しているインディアンの居住区があり、その地域に住むインディアンたちの生き様との対比も考えたのです。更に、アメリカンドリームの人生の最終局面で人々がどのように生きてゆこうとしているのか、その結果はどうかをつぶさに参照できる、年長者の町サンシティも近くにあります。それでこの、マリコパが最適ということになったのです)

「*****」(具体的にはどのような活動をなさっているのでしょうか?)

「*****」(最初に国民の意識の調査から始めました。現状認識のためです。これには時間が掛かりました。貧困層の人たちは、謝礼を出せば簡単に応じてくれましたが、富裕層の人たちは、忙しいという理由でなかなか応じてくれませんでした。そこで、母数に偏りのあるデータから統計手法を使って、推定を行ったのです。しかし、この推定値は議会に受け入れられませんでした。それが、現在のアメリカの進んでいる方向を否定する結果だったからです。国民の大半が社会保障の行き届いた、国が生活基盤を補償する平等の社会を期待していたのです。贅沢や、夢を追う人々は少数だということが分かりました。それに年収やローン

の数値を組み込んでみると、統計的には分布の中心部分を貧困層が占めていたのです。家や、家財があっても、貧困な人々が沢山居ることがわかりました。そして、その人たちの意識の中に、完全に社会保障された国家への憧れの感情があることが分かったのです。議会がこの数字をそのまま受け入れようとはしないので、プロジェクトは別の方法を考えました。それが国民の意識改革です。問題点を国家から国民の側に移したのです。犯罪の土壌になっている移民などによる生活貧困層で生きる人々の意識の改革と、一部の投資家の投機等の拝金思想を改善し、国の偏った富の分布を修正し、平等な社会を実現するという内容に変更したのです。それで、議会の承認が降りました。現在は週刊紙を発行し、意識付けを行ったり、有志のアーティストを使ったキャンペーンで若者達に訴え掛けたり、あるいは、移民支援センターを作って、支援を行ったりしていますが、一部の人たちの意識は変わったとはいえ、ゴールはまだ遙か彼方で、その位置さえ確認できないような状態です。このような自由を標榜している国家では、国民の意識を劇的に変えるには、オリンピックとか、スペース・シャトルの打ち上げとか、そういう強いインパクトが必要だと思っています)

賢はアメリカの国家全体としての意識改革の取り組みが、思ったほど進んでいないことを知った。アメリカの意識改革は日本で取り組んでいる意識改革の方向とは異なっていると思った。物質偏重社会から精神性重視の社会へのパラダイムシフトをする段階には至っていないようだった。このプロジェクトの目的はあくまで人々の生活の安定、社会保障という人間の生活基盤の安定に矛先が向いていた。賢はこれ以上詳細な質問をしても意味が無いと思った。梓が、プロジェクトの組織や、構成人員、詳細な実施内容などに附いて質問し、訪問を終えた。一行はそれから、パトリックに案内されて、組織の事務所を見学し、これまでの成果を示す資料の閲覧をさせてもらってから、マリコバ群庁舎を後にした。

サンシティ

次にサンシティを見学することになっていた。一旦フリーウェイ17号線に乗り、ウェスト・サンダーバード・ブルバードで降りて西に向かった。20分ほど走るとサークル状の道路に入り込んでしまった。どうやらその辺りがサンシティらしい。平日とはいえ、人影が全く無い。サークルの中心に着くとそこに教会があった。サンシティは小さな町だった。賢は人影の無い道路を、約束をした家を探して回った。砂漠の中に造られた町だけあって、あまり緑が多くなく、ところどころにサボテンが植えてある程度だ。漸くサークルの外周に近いノース・マクフィー・ドライブという道沿いのビッキー・クライトンという人の家に辿りついた。それは70歳を超えた婦人だった。一人住まいしているとのことで、機嫌よく家の中に通された。部屋は小綺麗になっていて、壁には家族の写真が一杯飾ってある。ビッキーは写真をいちいち説明した。居間に通されたがそれほど大きなソファは無く、ダイニングテーブルの椅子を4脚運んで来てくれた。それから、台所に入り、皿に盛ったチョコレートクッキーを持って来て、ソファの前のテーブルの上に置いてくれた。婦人は直ぐに台所に戻り、今度は紅茶を6つ用意してくれた。どうやら、事前に賢たちの接待の準備をしてくれてあるようだった。

「*****」（皆さん、はるばる日本からいらしてくださったのね。お待ちしていたわ。ここは、市の行政機能みたいなものは無いのよ。でも、必要なものは一通り揃っているわ。わたしのような高齢者には生活しやすい場所よ。ショッピングセンターもあるし、市としてのサービスもあるのよ。ここは不動産会社が造った人工の町なのよ。幸いわたしは主人の残してくれたお金があるからここに住めたけど、お金が十分に無い人たちは、ここに住むのは難しいかもしれないわね。でももし、働こうと思えば、働く場所もあるのよ……でもね、やはり寂しいわね。わたしの家族はコネチカットに住んでいるのよ。家族が多いので、わたしは老後をここで過ごすことにしたの。時々家族が遊びに来るわ。でも、やはり、寂しいわね。お隣さんともあまり会うことも無いしね。この町には3万人も住んでないのよ）

ここでは亜希子と梓が質問をした。

「*****」(一番喜びを感じるのは、やはり、家族と一緒に居るときですか?)

「*****」(そうね。それは2番目かしらね。1番目は、無くなった主人と一緒に生きていたときのことを思い出しているときね。一人で居ても、生きていけるのは、主人と一緒に生きていたときの楽しい思い出が沢山あるからなのね。昔の思い出の品物や写真を出して、その頃のことをずっと追い掛けてみるの。そうすると、時間がその時に戻るのよ。本当なのよ。あのひと、優しかったのよ。旅行に行っても、いつも危なそうな所では、手を引いてくれたわ。わたしの足がだるいときは、自分の身体も悪いのに、よく摩ってくれたの。あの人が生きていたときは、当たり前のことだと思っていたのよ。でも、亡くなってからはわたしの中身が無くなったようになってしまったの。3年ほどは、わたしは抜け殻のようだったのよ。娘夫婦には随分、面倒を掛けたと思うわ。わたしの心も落ち着いて、やっと普通の生活ができるようになったので、ここに移ることにしたの。娘夫婦にも、もうこれ以上苦勞を掛けたくなかったのよ。わたしはね、だから、ここで、一人きりで死んでも、何にも辛くないのよ。あの人をわたしの心の中に生きているから)

ビッキーは自分の胸を指差して言った。亜希子が言った。

「*****」(ご主人を愛していらっしやったのですね)

ビッキーは笑いながら言った。

「*****」(あなた、亜希子さんと言ったかしら、愛していたのじゃないのよ、今も、ずっと愛しているのよ。分かるかしら?あの方は、姿は見えないけど、わたしのここに居るのよ)

ビッキーはもう一度自分の胸を指差した。そして、壁から1枚の写真を外して来た。それがビッキーの夫だった。それ程の美男子ではない。背もビッキーより低いし、体格もよくない。ビッキーはその写真を全員に廻して見せた。

「*****」(あまり、格好よくないでしょう。だけどね、わたしは、この人が一番素敵な男性に見えるのよ。本当は、もっと美男子だと思うの。この人、きっと、わたしの前に姿を変えて出てきたのよ。まだ、時

間あるかしら？わたしたちのなり初めを聞いてくれるかしら？)

亜希子が賢の方を見た。賢は頷いた。亜希子が言った。

「*****」(はい、大丈夫です。まだ時間があります)

「*****」(そう、それはよかったわ。それじゃ、お話しするわね。わたし達の出会いは劇的だったのよ。この人・・・トミーって言うんだけど、・・・トミーは変わった人だったのよ。16歳のとき、わたしはニュージャージーの女性だけのミッションスクールに通っていたの。トミーはあまり知られていない、クイーンズにある自動車整備店に勤めていたのよ。わたしが友達と一緒にニューヨークのエンパイヤ・ステート・ビルディングに遊びに行ったときのことなの。当時、セントラルパークは危険な場所で、昼間でもあまり近づく人がいなかったのよ。でも、「わたし達は神様にお祈りしているから、絶対大丈夫だわ」って、友達の中で一番元気な人が言ったの、それで帰りにセントラルパークを見てみようということになったの。正直わたしは怖かったのよ。でも大勢だったから・・・そうね、そのときは6人だったかしら・・・そのリーダーみたいな人が先頭に立って、セントラルパークまで歩いたのよ。そして、恐る恐る公園の中に入って行ったの。公園の中は紙くずや、ポップの缶が散らかっていて、とても汚かったわ。もう、夕方になってきていて、皆怖くなって来たの。そこから出て、早く帰ろうということになったのよ。そして、振り返ったら、そこに、3人の不良みたいな身なりをした若い男が立っていたの。白人2人と黒人1人だったわ。ニヤニヤしているのよ。皆、戦慄を覚えて身体を寄せ合ったわ。今でもそのときの背筋に冷たいものが走る感じをはっきり覚えているわ。今思えば、わたし達は6人だったから、勇気さえ出せば相手が男性でも、3人だけだから大丈夫だったと思うのよ。でも、怖くなってきて、みんな泣き始めたの。そしたら、3人の男のうちの一人が言ったの、その言葉も覚えているわ。「可愛いじゃないか」って言ったの。わたし達はガタガタ震えていたわ。その場所はセントラルパークのかなり奥まで入った所だったから、人影はどこにも無かったの。その男が「可愛いじゃないか」って言ったら、二人の男が近づいてきて、友達のあごに手を掛けて、引き上げるように

して顔を覗き込んだの。そして、「結構、美人ぞろいな」って言ったの。その娘は怖くて震えだしたわ。涙も出なくなつて、顔色が真っ青になったの。そのとき、偶然あの人を通り掛つたの。あの人、近くに来るまで、気が附かなかつたみたいなの。傍を通り掛つて、ふとその真っ青になった友達の顔を見たのね。そのときは不良の男たちはわたし達から少し離れていたのよ。あの子の言葉、今も頭に響くわ。友達に向かって言ったの「あなた、どこか気分が悪いのですか？顔色が悪いですよ」って。それから、ガタガタ震えているわたし達に向かって、「どうしたのですか？」って言ったの、それから、3人の不良の方に視線を向けたの。不良たちは身体が大きかったから、あの子の姿を覗いてだと思つたけど、高飛車に言ったの「おめえは、なんだ？」って、そのときあの子は「ぼくは、通りすがりのものですけど、あなた方はどこから来たのですか？」って聞いたの。「この公園は、夕方は不良が悪さをするから、危険ですよ。早く帰つたほうがいいですよ」って言ったの。男は確か、「余計なお世話だ」とか何とか言つて、あの子に食つてかかつたと思つたら、いきなりあの子を突き飛ばしたの。あの子は、初めて、男達が不良だと分かつたみたいだった。わたし達に向かって言ったの「君たち、もう遅いから、帰りなさい」って、わたしたちは震えていて、動けなかつたわ。そしたら、「大丈夫だから、深呼吸をして、ここが学校の前の公園だと思いなさい」って言ったのよ。わたし達は必死に言われたとおり学校の前の公園を想像して、目を瞑つてその場から一目散に駆け出そうとしたの。そしたら、不良の一人が「おい、待て」と言ったのよ。そのときのあの子の言葉と姿が、わたしの心に焼きついたわ。「君たち、一体何をしたいんだ？同じアメリカに生まれた仲間じゃないか。僕達がこんなか弱い人たちを守つてやらなくて、誰が守つてやれるんだ」って言ったのよ。不良は猛り狂つて、あの子を殴つたり、蹴つたりしたわ。あの子は、「早く帰りなさい、さあ、早く」と言いながら、サンドバッグのように殴られていたわ。わたし達、泣きながら駆けたわ。必死に駆けて、交番に駆けつけたの。警察の人たちが急いで、公園に駆け込んで行つたわ。そして、直ぐに3人の不良と、あの子を連れて来たの。あの子、ぐつた

りしていたわ。顔が腫上がっていて、口や、目の縁から血が出ていたわ。不良はふて腐れていたわ。でも、あの人はおまわりさんに言ったのよ。「単なる、喧嘩です。ご迷惑をおかけしました」って、でもおまわりさんは3人の不良のことを疑っていて厳しく取調べようとしたの。でもあの人が不良の一人の肩を叩いて言ったの。「悪かったな」って、それでおまわりさんは全員の住所と氏名を確認してから、「気をつけて帰りなさい」って返したわ。不良は逃げるようにどこかに散ってしまったわ。でも、あの人はわたし達を、寮の近くまで送ってくれたの。こっちが心配になるほど、あの人の顔はひどく傷付いていたのに。あの人が、帰るとき、「あの人たちのことは忘れなさいね。楽しかったことだけ、覚えているんだよ」と言って、帰って行ったわ。あのひとはハイスクールを途中で中退したらしいの。貧しかったんだって。だから、仕事を終えたら、あの公園で一人静かに過ごすのが好きだったんだって。それが最初の出逢い、次の出逢いで、わたしはあの人と一緒に生きてゆこうと思ったの。ハイスクールを卒業して、わたしはニュージャージーのスーパーマーケットに勤めていたの。レジを担当できるようになっていて、その日も10あるレーンの一つを任されていたのよ。そしたら、あの不良の3人組が買い物籠に商品を一杯入れてわたしのレジに来たの。わたしには、あのときの3人組だと直ぐに分かった。心臓が飛び出るのではないかと思った。相手は気付かなかったようだけどね。そのときは店にほとんど客が居ないときだったので、レジはわたしのレーンしか開けてなかったの。周りには誰も居なかった。3人のうちの一人が小切手帳を取り出して、金額と名前をサインしたの、わたしはそれが偽造した小切手帳だと直ぐに分かったわ。発行者が聞いたことの無い銀行名になっていたの。それで、店長を呼ぶベルを押そうとしたとき、別の男がわたしの手を押さえたの。「黙って受け取れ」って言ったわ。もう一人の男が、ポケットからナイフを取り出して、わたしの前にかざしたわ。わたしは怖くて、震えだしたの。そのとき入り口からあの人が入って来たの。入り口を入ると同時に駆け出して来て、いきなりナイフをかざしている男に体当たりしたの。弾みで、わたしの右手の甲に僅かだったけど、切り傷が附いた

わ。男がナイフを振り回したの。それがあの人の腕に刺さった。かなり深くナイフが刺さったようだったの。でもあの人は必死になって3人と取っ組んだのよ。わたしの押したベルの音を聞いて、店長が飛んで来たわ。ナイフを振り回した男はあの人と取っ組み合っていたけど、他の二人は逃げてしまった。店長と他の店員が協力して、ナイフを振り廻した男を取り押さえたわ。あの人の手からは血が滴り落ちていた。でも、あの人は、わたしに向かって、「怪我は大丈夫か？」と聞いたの。そして、わたしの手を取ると、ポケットから、ハンカチを取り出して、それを破り、ほんの少し赤くなっているわたしの右手の甲に巻きつけてくれたの。そのとき、自分の左手に痛みが走ったようで、ナイフが刺さっているのに気付いたようなの。ナイフは抜かないで、そのまま救急車で病院に行ったわ。わたしも一緒に病院に行ったの。救急車の中でも、あの人は自分のことはさて置いて、わたしのことばかり心配してくれた。わたしは、嬉しかった。あの人がいつもわたしを守っていてくれると思ったの。この人と一緒に生きていたいと思ったわ。それが、わたし達が知り合ったきっかけなのよ。その後も、いつもあの人はわたしを労わってくれた。あの人が命を落としたときも、わたしを守るためだったの。この話は悲しすぎて話せないから、ごめんなさいね。今もあの人がわたしのここに居るのよ)

ビッキーは再び自分の胸を指差した。亜希子はそれ以上質問を続けなかった。梓が、サンシティの人々の生き甲斐について聞いた。ビッキーは応えた。

「この老人達は、ここに住むことを、人生のリタイヤだと思っているわ。自分をそのような位置づけにしているの。それは、自分の意思より、外部環境の影響で、そうなるケースが多いのよ。サンシティという呼称は、「高齢者が主体になって住んでいる町」というイメージを込めた呼び名で、正確な名称は、サンシティウエストと云うの。55歳以上の高齢者なら住むことができるわ。人口は地域全体で約3万8千人。それ以上にする意図はないよね。病院、協会、ショッピングセンター、図書館、テニス場、ボウリング場やスポーツ公園、生活に必要な機能は計画

的に整えられているのよ。この町は企業がトライアルとして計画的に造った人工都市なの、こうした高齢者の町が全米各地にいくつか造られているけど、全部足しても10万人に満たない程度の人しか住んでいないわ」

5人はビッキーの家を出て、近くのショッピングセンターと図書館、サンライズ・メモリアル・メディカルセンターという病院を見学し、市内のレストランで食事を摂った。外は曇っていたが、気温は高い。梓は行く先々で写真を撮っていた。どこに行っても、ここが高齢者主体の町だと実感できた。若者の姿がほとんどなかったのだ。賢は、「このような人工的な町はバランスを欠いていて、生気が無い」と感じた。食事を済ますと、賢は一旦フリーウェイ17号線に戻り、前回と同じように北上した。車がフェニックス市内を出ると、梓が言った。

「リーダー、意識改革センターとサンシティの報告をどのようにまとめましょうか？」

「梓、先ず、小塚君と長谷部君に感想を聞いてみよう」

これまで、ほとんど口をきく機会がなかった二人は、水を得た魚のように感想を話し始めた。先ず小塚が言った。

「ぼくは、あの意識改革センター、いいえ、プロジェクトですか、パトリックさんからは日本の官僚を見ているような印象を受けました。自分達の調査結果や予測がそのまま受け入れられないと知ると、手段を変えて推し進めようとする。その内、本来の趣旨が見失われて、プロジェクトが違った方向に向いてしまう。物足りなく感じました」

賢が言った。

「確かに小塚君の言うとおりにだね。その上、彼らの意図している方向は、我々の標榜する方向とは少しずれている様な気がするね。長谷部君はどう感じた？」

長谷部も力強く言った。

「ぼくは、意識改革センターについては、実行の手段が、あまり芳しくないような印象を受けました。調査するのはいいのですが、その後のキャンペーンについての考え方が、いかにもアメリカ的だと思いました。

尤も、日本も同じようなものかもしれませんが、オリンピックやスペースシャトルの打ち上げのようなイベントを通じて意識改革を図ろうとすることには無理があると思います。アメリカという国独特の国民性があると思いますから、そういう部分に食い込ませるような、取り組みにするべきだと思います」

「うん、僕もそう思うな。我々もまだ計画段階だから、あまりえらそうなことは言えないけど、あのやり方じゃ、国全体の意識の方向を変えるのは難しいかもしれないな。確かにアメリカという国は、ああいふイベントに情熱を燃やすと一気に国民の意識が変化するというのを何度か経験してきているから、あのような手段に出ようとするのだろうけどね。それはワンチャンスのものだから、それを意図的に実現させようとすると、かなりの無理があるように思うね。資金も必要になるしね」梓は持って来たボイスレコーダーで二人の話を録音していたが、操作の手を休めて二人に向かって言った。

「小塚君と長谷部君、アメリカは2回目でしょう。印象はどう？」

「はい、部長、アメリカばかりじゃないかもしれませんが、テレビで見ているアメリカと、実際に来てみたアメリカでは、全く別の世界のような印象を受けます」

長谷部が応えた。それに対して梓が言った。

「長谷部君、だから、今回はあなた方を連れてきたのよ。君たちは毎日パソコンの前でキーボードを叩いて、意見交換なんかをしているでしょう。その意見の元になるのは、会議で得た情報、新聞や雑誌から得た情報、テレビから得た情報、業者から得た情報なんかでしょう。だけど、実際の活動が行われている場所に出向くと、全く違った印象を受けることがあるのよ。それはそうよ。メディアなんかで取り上げる情報は、その情報を得ようと思ったカメラマンや、記者の意識の眼を通して得られたものでしょう。だから、大統領の演説のニュースでは、その演説を聴いていて、疲れてあくびをしている年寄りがどれくらい居て、その場の雰囲気はどうだったのか、自分で感じないと分からないのよね。だから、長谷部君が感じたアメリカは、いつもカメラマンが見ているアメリカと

違うのよ。来てよかったでしょう」

長谷部は頷いた。小塚が言った。

「部長、本当のことを言うと、ぼくは今度の出張は、調査内容そのものよりアメリカという国の大自然と、その中にある都市文化を肌で感じたかったです。こんなことを言うと叱られるかな？」

「建前的にはあまりよくないけど、わたしもそういう意識が大切だと思うわ。十分感じて帰るのよ。だけど、都市文化だなんて言ってカジノに嵌ったり、酒に現（うつ）を抜かしたりしちゃ駄目よ」

「ハイ、肝に銘じておきます」

小塚がそう応えると、賢と亜希子が笑った。賢が言った。

「二人とも、いろいろ経験するのはいいことだと思うよ。一つだけ心に留めておいて欲しいのは、アメリカ人の意識がどういう方向を向いているかにいつも気を使っていて欲しいということだ。そういうことは以外に、みやげ物を買うときの店員とのやりとりのような場面なんかで、感じられたりするもんだからね」

「はい、分かりました」

二人同時に応えた。梓が言った。

「それじゃリーダーと亜希子さん、感想を言っていただけますか？」

梓は再びボイスレコーダーのスイッチを入れた。

「じゃ、ぼくから話すね。あくまで、意識改革という点から見た感想だけどね、意識改革プロジェクトの方は、まだアメリカが物質文明の中に入り切っていて、そこから抜け出そうとする意思を持っていないように見えたね。それは、貧困層や富裕層という切り口で改革をしようとしている点からも分かる。貧困とか富裕とかいう条件は、あくまで人間がこの3次元社会で生きてゆくときの、快適さ、生き易さという観点になるのであって、それによって意識改革が進むかどうかはあまり関係ないように思うんだ。だから、社会保障というの、意識改革の中にあっては、精神の安定性を確保するという意味では大きな意味があるけど、肉体の保全の目的だけでは不十分な気がするね。それと、小塚君の言うように、意識改革の具体的な取り組みは、国民全体にまで浸透させることができ

るような手段だとは思えないね。それから、サンシティの方だけど、あのように、高齢者だけを対象にした町というのは、場としてのエネルギーを弱らせてしまうと思う。それは、あの街に入ろうとする人たちの意識が、自分達は高齢者なのだから、「のんびり余生を楽しもう」何ていう類のものだから、当然、活気を失うよね。心の安定を求めているのだとすれば、それはそれでいいんだけど、その先に訪れる死を不安視していると、意識の不活性を招いてしまうと思うんだ。サンシティにはそんな雰囲気があったね。ああいう場所を、小社会として作るときは、理念が大切だね。とっても参考になったよ。亜希子はどう思う？」

「わたくしも、とても参考になりました。サンシティについての意見だけお話をさせていただきますが、単身で生きておられる方々が半数近くだと伺いました。でも、あのビッキーさんの生き方は、わたくしにはとても参考になりました。あの方は、ご主人が生きておられた頃から、肉体と精神のバランスが取れていたのではないかと思います。ご主人は肉体が消えても、心の方はそのまま息づいていらっしゃる。それを、身をもって体験されておられました。とても素晴らしいです。そして、愛が肉体を伴う情のほうには傾いていなくて、ご主人が亡くなられても、そのまま愛し続けていらっしゃる。ほとんどの人のできないことが、おできになっていました。あのような方にとって、サンシティはとても素晴らしい世界だと思います。周囲は静かで、大きな音を立てる車も走っていませんし、近所にはワンワン吠えるうるさい犬なども居ませんから、とても穏やかに、日々を瞑想の中で過ごすことができると思います。わたくしの感想は以上です。こんな感想でもよろしいのでしょうか？」

梓が言った。

「皆さん、感想ありがとうございます。わたくしも大体、皆さんと同じような感想を持っています。後でまとめたいと思います」

セドナ

車は北上を続けた。3時間ほど走ると、賢が「この辺りがセドナだよ。」

セドナの横を掠めて通っているんだ」と言った。亜希子と梓は、つい先日ここで体験したことを思い出し、改めて、自分達の持っている不思議な力に身が引き締まる思いがした。グランドキャニオンのサウスリムにあるホテルに着いたのは4時過ぎだった。車を駐車場に止め、荷物を下ろして、ホテルのエントランスを入ると、賢はロビーのソファに一人の老人が手を挙げているのに気付いた。ホピの長老マートウエイン・ガウスファウル・フライヤーだった。賢は驚いた。亜希子と梓も長老に気が附いた。3人は小塚と長谷部をその場に残して、右手奥のレセプションコーナーに行った。

「Hello, Elder. How are you? Why are you here.」(こんにちは、長老、ご機嫌如何ですか？ どうしてこちらに？)

「Hello, my friends. Welcome to the Indian land again. I have been waiting for you today. Why did you come back here?」(こんにちは、わたしの友よ。ようこそ、再び、インディアンの地に。今日、ずっと待っていましたよ。どうして、ここに戻って来たのですか？)

「*****」(わたし達は、今度は、アメリカにおける具体的な意識改革の取り組みに附いて調査するために戻って来ました。でも、どうして、わたし達が戻って来るのが分かったのですか？ しかもこのホテルに？)

「*****」(わたしには、メディシン・ホイールがありますから、あなたがたが今日、再び戻って来ることが直ぐに分かりました。ここに来たのは、昨夜この位置からキャニオンを見ている夢を見たからです。夢が外れることもあるのですが、今回は当たりましたね。何かこのあたりのことを調べるのですか？)

「*****」(はい、今度はナバホについて調査する予定です。ナバホの居住地区はインディアン居住区の中で最大でしょう。ホピも同じでしょうが、第2次世界大戦当時にウラン採掘で被爆した人たちが大勢居るでしょう。その方達がどのように生活されているのか、それから、これもホピの人たちと同じかも知れないけど、以前は戦いと儀式にその役割を担っていた男性達主導の仕事が無くなり、母系家族の様相を呈して

いると謂われているでしょう。そのような社会のあり方を知りたいのです。それと、家々が点在しているナバホの人たちの生き様も拝見したいと思っています)

「*****」(わたしたちインディアンは、アメリカの政府に同調しているわけではありません。西洋の人たちが押し寄せて来て、わたし達の自然と融合した生き方を止めさせようとした時、我々は激しく抵抗しました。しかし、その一方で、生き残る道も模索していたのです。西洋の人たちはもし自分達に従わないのであれば、われわれを殲滅しようとしていました。完全に征服して、自分達の国を打ち建てようとしたのです。国は法律や規則で人々の意識を奴隷のようにしてしまいます。物質的な発展を目指し、道具を駆使して人間だけが住みやすい世界に変えようとしています。それがこの世界に歪をもたらすとも知らずに……そう、先ずチェックインしてください)